
One scene story

ATS

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

One scene story

【Nコード】

N4733D

【作者名】

ATS

【あらすじ】

日常、非日常の中の小さな一場面を切り抜いた恋愛物です。幸せな形も、哀しい形も織り交ぜて、シリーズ物ではありませんが、一作毎にそれぞれのワンシーンが用意されていますので、貴方の気に入った物語があれば幸いです。

シーン001：色

瑞葉が事故によって視力を失ったのは、そう、すべての音を消し去ろうとする様な、雪の花びらが舞い散る寒い冬の夜だった。

「わあゝキレー」

瑞葉はロングのフレアにヒールの高い革のブーツと言った格好にも関わらず、東京にしては珍しく積る程の雪にはしゃいでいた。

「瑞葉、そんなにはしゃいでいると……」

と、俺が言い終わらないうち

「ドスン！」と言う鈍い音と共に、瑞葉が足を滑らせて尻餅を付く

「いっつ、痛あゝ」

「あははははははははは」

「つつ、何もそんなに笑わなくてもいいじゃない！」

瑞葉はふくれつつらで

「ほら涼、レディーには優しくするてーのが男のつとめでしょ」と言つて、手を突きだしてきた。

「ええ？ 何処にレディーがいるって？」

俺がそんな瑞葉の言葉に少々とぼけて見せると

「言つたわねえ」

と、瑞葉は握られた雪を固め、俺を目掛けて投げてきた……
普段ならこんなにはしゃぐ事などは珍しかったのだが、東京にしては珍しくなつた雪のせいか、夕闇のカーテンが昼と夜との世界を分けようとするまで、いつもと少し違う東京の町を楽しんだ。

それにしても、いくら雪の降らない地方で育ったからって良くもまああんなに楽しそうにはしゃげるよ……

少し前に聞いた話では、瑞葉は九州の雪の降らないところで育つたらしく、10歳の時に初めて雪を見た時には相当に感動したらしい。

なにせ、普段は信じもしない神様が、自分の為に白い花びらを舞い降らせて銀色の舞台を作り上げてくれてるんだと本気で思ったそうだ。

その事を俺が「なんともまあ、乙女チックな事で」と、からかった時、瑞葉が「だって乙女ですもの」と、澄ました顔で答えたのを覚えている。

まあしかし、初めて見た銀色の舞台に感動し、クラシックバレエを始めるきっかけにすなった程だ、アレくらいの事は本当に思ったのかも知れない。

そう言う部分で、瑞葉は乙女チックな部分を本当に持っているからだ……が、しかし、実はこの初めて見た雪の話には続きがある。

銀色の舞台で1時間位ボーっと口を開けたまま立ち続けていた瑞葉は、その日、ひどい熱を出して寝込んだらしい。

俺はそんな話を聞いて、いかにも瑞穂らしい話だと思った。

ボーっとしてる所とか……ね

俺はあの日、そんな事を思い出しながらアパートへと帰った。そしてあの留守電を聞く事になる。

あの日のあのメッセージを聞いた時の事が、今でも詳細に記憶の中に残っている。

「おっと、留守電にメッセージが入ってるな」

貧乏な一人暮らしの学生に、無理矢理、留守電機能付きの電話を買わせたのは、同郷と言う事で知り合った同じ学科の先輩だった。

当初は電話なんてと言う思いが大きく、買わされてしまった感覚が強かったものだ。けれど、使って行く内に、あればあったで意外と便利な物だと思っ様になっていた……。

アレはそんな頃だった。

留守番電話のメッセージが入っている事を知らせる赤いランプが、今でも嫌な記憶と共に思い出された。

ピーッ

「ロクオン・ハ・二件デス」

機械的な音声が二件の伝言がある事を告げる。

一件目は同じゼミを受講していたやつからで、レポートがどうのとか言う、どうでも良いような内容だった。

そして、二件目。

いつもはのんびりとした口調が特徴の瑞葉の母が、少々早口ぎみに用件だけを入れたものが、俺の耳に飛び込んできた。

「あ、もしもし、涼君ですか？ 高科（瑞葉の名字「たかしな」）です。今日ね、涼君と別れた後に瑞葉が交通事故に遭って、今の病院から……」

俺はその留守電のメッセージを聞き終わると、上着を着るのももどかしいくらいに家を飛び出して、瑞穂が運ばれた病院へと駆け出した。

外は、あれからずっと降り続いていた雪が……少し積もりかけていた。

俺は、乱れた息も整わないまま、受け付けから瑞穂の居る病室を聞くとエレベーターに飛び乗った。

5階へ行くまでがひどくもどかしく感じられた事も覚えている。そして5階に付き、瑞葉がいる病室の前まで来た俺は、乱れた呼吸を整えなければと辛うじて思い、何度か深呼吸をして気持ちを落ち着かせてから病室のドアを少し震える手でノックした。

コン・コン

「はい」

病室のドアが開き、最初に出てきたのは瑞葉の母で、電話の時よりも幾分落ち着きを取り戻したのか、俺の顔を見ると少し表情を緩ませながら話し出した。

「ごめんなさいね。突然電話で呼び出してしまって」

「いえそんな事は……それよりも、瑞葉の具合はどうなんですか？」俺は自分では気が付かなかったが、静かな病室に大きく響く程の声を出していたらしい。

瑞葉の母親は少々声のトーンを落としながら説明してくれた。

「ええ、車に轢かれたとは言ってもね、それ程相手の車もスピードが出ていたわけでもなかったらしくて、体の方には骨折とかはなかったの。だけど……」

ここで少し間を空けて、ベッドで寝ている瑞葉に聞こえない様に、

更に声をひそめて説明してくれた。

「ただね、今はちよつと視力の方が戻って無いらしいの。詳しくは検査してみないと解らないらしいんだけど、お医者様の話だと外傷らしいものが見当たらないらしくて、一時的なショックが原因による精神的な視力障害なんじゃないかって……」

瑞葉の母親はそこまで説明してくれると「高科さんのお母さんです
ね」

「はいそうです」

「ちよつと来ていただけますか？」

と看護婦に呼ばれ、入院するのに色々な手続きがあるのか

「ごめんなさい涼君。ちよつと瑞葉の側に付いていてくれるかしら」と、言つて病室を後にした。

「りよう」

瑞葉の母親が出て行くと、痛々しく目を覆うように包帯をしてベッドに寝ている瑞葉が俺を呼んだ。

俺はそんな瑞葉のベッドに近づくと、直ぐ横に置いてあつた椅子へと腰を掛けた ……すると、瑞葉は包帯が巻かれていて見えないながらも、こちらの方を向いて

「あははっ、私つてドジだからさあ、車にハネられちゃった」

と、たぶん、俺に心配をかけたくなかつたのか、それとも自分自身の平静も保ちたかつたのか、努めて明るさを見せながらしゃべりだした。

そんな瑞葉を見て、俺はかなり無理をしているな と、思わざるを得なかつた。今は、それこそ事故の直後だけに色々と気が張っているから良いが、このまま視力が戻らないような事になったら

……きつと瑞葉もその事が気になっているのだろっ、表面の明るさが逆に不安な心を表していた。

それを思うと、俺は居たたまれなくなっで瑞葉の手を強く握りしめた。

「瑞葉」

すると今までの緊張が一気に取れたのか、俺の手を強く握りかえすと胸に顔を埋め、肩を震わせながら声を押し殺すように泣き出した。

「わ、私、このまま視力が戻らなかつたら……」

このまま光を失ってしまうのではないかと言う不安が、瑞葉の心を押しつぶそうとしているのか、俺の手を握る彼女の手に力が入った。

「りよう……」

「大丈夫だよ瑞葉。事故のショックで、一時的に視力が戻らなくなっているだけさ」

「でも……でも」

「大丈夫、きつと見える様になるさ」

今の俺にはこう言っで瑞葉を安心させる事しか出来なかつた。

それに、絶対に瑞葉に視力が戻ると言う事は信じていた。

だって、あれ程澄んでいて真っ直ぐな瑞葉の瞳に、光が戻らないなんて事を信じたくなかつたから……

しかし、この後一年を過ぎようとしても瑞葉の目に視力が戻る事

は……なかった。

あの後瑞葉は、検査の為に一週間ほど入院したのだが、視力が戻らない以外は大した外傷も無かったので、まもなく退院して自宅に戻る事になった。

医者の話によれば、頭部の外傷はまったく認められない状態で、事故による精神的なショックが引き金となった視神経障害だろうと言う事だった。

「この先、突然視力が戻る事も、一生戻らない可能性もあります」と、担当医は淡々と説明を続ける。

「これは少し珍しいケースでして、本人が一生このまま視力が戻らないのではないかと言う、恐怖心や脅迫観念なども視力の回復を妨げているのではないかと考えられます。治療と言うものはありません。後は、患者本人の心の問題です」

瑞葉の心の中の問題

俺はこの言葉を聞いて、自分は一体瑞葉の為に何をしてやれるだろう。何をしてやらなくてはならないのか……初めの頃は全く分かってなかった。

だけど、一つだけハッキリと思っていたこともある。

瑞葉は絶対に目が見えるようになる。

どんな状況になろうとも、俺だけは信じていよう、そう思った。しかし……そんな俺の気持ちも、今の瑞葉には逆にストレスになってしまったのか、一向に回復の兆しを見せようとしなかった。

そして、目の見えない瑞葉の顔から、ひとつつつ表情が消えて行くのが、どうする事も出来ない俺にとっても辛い日々になった。

「瑞葉、今日はさ、こんな季節には珍しい綺麗な花を店先で見付けね、買って来たんだ」

あれから俺は、出来るだけ瑞葉が興味を持ちそうなものを買ってきたり、話をする様になった。もちろん、瑞葉の「見たい」と言う気持ちを引き出す為にだ。

「ははっ、花屋にさ男は俺一人だったから、ちょっと恥ずかしかったよ」

視力は心因性のものと考えられます。

俺は医者 of 言葉を信じ、少しでも瑞葉の「見たい」と言う気持ちを掻きたてれば、いつか視力が戻ると信じていた。

このまま、瑞葉の瞳に俺の姿が映らない様な事には、絶対になつて欲しくなかったから。

「……………」

「ほら、結構良い香りがするだろう」

そう言いながら、俺は買ってきた淡い紫の花を瑞葉の顔へ近づけようとした。

「ヤメテ……!」

突然、瑞葉はその花を払いのけると手で顔を覆いながら泣き出した。

「もう……やめて。無理なのよ、一年も視力が戻らなのよ。これからだって視力が戻る事なんて無いのよ」

目が見えない事のストレスがここに来て抑え切れなくなったのか、感情に任せるままに、自虐的な言葉を放つ瑞葉を見るのは初めてだった。

しかし、そんな風に苦しむ姿を見ても、俺自身には瑞葉の持つ不安や絶望、ストレスと言った感情を理解しようとしても理解する事は出来なかった。

いや、瑞葉の事を心配する事は出来ても、瑞葉自身の持つ不安やストレスと言うものは、目の見える俺には理解出来ないと言った方が正しいだろう。

いくら目の見えなくなった瑞葉の様に目をつぶって見ても、目を開ければ俺にはものを見る事が出来る……どうやっても、瑞葉の本当のこころを理解する事は出来ようが無い。

だけでも

「何言ってるんだよ瑞葉。先生だって心因性だって言ってたじゃないか、これからだって……」

「もう……無理よ。私は一生暗闇の中で暮らさなくてはならないの。誰にも、光を失った私の気持ちなんか、理解できないのよ」

何かの悲劇のヒロインを思わせるかの様に自嘲ぎみな言葉をはく瑞葉に

俺は

パン！

俺は瑞葉の頬を平手で叩いていた。

「ああ解らないさ」

俺の手は微かな震えが止まらなかった。

「どんなに考えたって、目が見える人間には理解できる訳がないさ。目の見えない人の不安や恐怖なんて言うものは。だけど……だけど、俺だって悲しい顔しか見せない瑞葉を見るのは 本当につらいんだ」

「瑞葉が悲しいなら、俺だって悲しい」

「瑞葉が不安なら、俺だって不安だよ」

「逆に」

「瑞葉が楽しいなら、俺だって楽しいし、幸せなら、俺も幸せになるんだ」

「瑞葉……」

瑞葉は、頬をたたかれたショックより、自分の事を本当に必要としてくれる人間がいるのが嬉しかったのか、大粒の涙を拭う事もしないで流し続けた。

「何で……何で忘れてたんだろう 私 は一人じゃ無い事を」

「そうさ、瑞葉は決して一人じゃない。俺はどんな時でも瑞葉の側に居て、そして信じてる。何時かまた、俺の顔を見て笑ってくれるのを」

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

泣きながら何度も何度も謝って来る瑞葉を、俺は力一杯抱きしめて、長く、そして涙まじりのキスをかわした。

季節は冬

あの時と同じ様に、窓の外は厚く空を覆う雲が今にも真っ白な雪

の花びらを舞わせようとしていた。

「瑞葉」

「ん？」

「雪が……」

しばらくの後、二人の事を祝福するかの様に振り出した雪は、本当に銀色の舞台を作り上げる、真っ白な雪の花びらだった。

「りょ……う」

「ん？」

「まるで神様が、私達の為に銀色の舞台を用意してくれているみたい」

シーン002：想い

俺は久しぶりに出席するクラス会で彼女の姿を探していた。

彼女とは小・中と同じ学校だった俺の初恋の人である。

きっかけは何だったのか　と、聞かれても、もう大分前の事で忘れてしまったが、彼女は小学校の時から目立つ存在だった。

それと言うのも、彼女には美術系の才能があつて、絵のコンクールや毛筆や硬筆などの選考会で入選しては、朝の集会の時に度々表彰されていたからだ。

そんな彼女は、決してコンクールだから頑張ると言う訳では無く、普段から何事に対しても真剣に一生懸命取り組む女の子で、集中している時の彼女は、凄く素敵で女の子に見えた。

当時、元気だけが取り柄の悪ガキだった俺は、そんな彼女の姿を、後ろから眺める事しか出来ずに苦しさだけが胸の中に残った。
どうしてこんな気持ちになるんだろう？

小学生の時には漠然とした気持ちに答えを見つける事が出来なかったが、中学にもなると、それが彼女に対する恋愛の気持ちと言う事に気が付いた。

そして、彼女の事が好きになるに連れて、彼女よりも輝ける自分にならなければ……と、そんな気持ちが大きくなっていった。

そんな理由から、単純な俺は何か一つでも彼女よりも優れたものを持ちたいと、ガムシヤラに色々な事を頑張った時期があった。周りの悪ガキ仲間だった連中にちゃかされながらも、俺は本気で彼女に追いつきたいと思っていたのだ。

勉強も、スポーツも色々。

その甲斐もあってか、どれもそここの成績を上げる事が出来るようにはなったものだ。だがしかし、それと同時に俺の中には何かが違うと言う違和感も感じる様になっていた。

最初、頭の悪い俺はそれが何であるのか全く解らなかった。

学力テストではそこそこ上位に顔を出せる様になり、運動でも人に負けないだけの努力をしたし、昔からは考えられない様な生徒会活動なんかもやった。

それでも、俺は彼女に対して、どこか追いつけないモノを感じていたのだ。

悩んだ。

あの時くらい真剣に悩んだ事なんて、後にも先にも無かったかも知れない。

そのかいもあってか、俺は彼女の違いと言うモノが少しだけ見えってきた。

そう、彼女の努力する姿と自分の努力する姿の違いと言うものだろうか、彼女には彼女らしい姿と言うものが感じられるのに、俺にはそれが無い事に気が付いたのだ。

「自分らしさ」

純粹に良い物を作りたいとか、純粹に自分の可能性を試してみたと言う、彼女らしくて前向きで純粹な気持ち。

俺にはそう言った純粋な気持ちが欠けていた様に思える。

その事に気が付いた時、俺はいくら自分が努力しても彼女には追いつける訳が無いと思った。

俺には自分らしさを見付けだす事が出来るのだろうか？
そして、堂々と彼女に告白が出来る日が来るのだろうか

- あれから10年もの月日が流れた -

「あつ、いたいた！」

「涼君結婚が決ったんだって？」

「おめでとおー」

「ええゝ本当に？」

「何だよ涼、俺に一言も……」

同窓会で久しぶりに会うクラスメイト達が、どこで聞いたのか、俺の結婚が決った事をからかいと祝福で迎えてくれる。

「相手は瑞葉なんですよ」

「やるうゝ」

すると誰かが気を利かせたのか、みんなが結婚行進曲のリズムを取って、俺を会場の中央へと押し出した。

そこには今も昔も変わらない彼女が、笑顔で俺を迎えてくれる。

「君に追いつく事が出来て良かった」

俺はそう言っていると、彼女をエスコートするように手を差し伸べる。
すると彼女は

「えっ？」

と、少し不思議そうな顔を見せたが、俺の手へ指輪のはまった手を重ねると、あの頃と変わらない笑顔を見せてくれた。

シーン002：想い（後書き）

皆さんは、初恋の相手の事を覚えていますか？

私の初恋の人は、実はこの想いに登場した瑞葉の様な女性でした。彼女は勉強も出来たし、美術の方面では小学校の頃からその才能を発揮していた女性で、聞く話によると、後に美大に通って陶芸の道に入ったそうです。

私とは言えば、長い事彼女の事が忘れられずにいましたが（小学校からの仲間内では有名な程……）結局、この物語の涼の様にはなれずに彼女には遠く及ぶ事が出来ませんでした。

ふむ……小説や物語の中には、自分の理想とする自分を登場させると言いますが、いつになったら涼の様に彼女に追いつける日が来るものか。

自分らしさを探す日々は、まだまだ続きそうです。

シーン003：距離

ただ大きいだけが売りの脂っこさがキツイピザを、炭酸の抜けたコーラで胃に流し込む生活にもだいが慣れてきた。

あれからもう1年が経つのか　俺は一年前の事を、思い出していた……

「なあ瑞葉」

「んんっ？　なあに　　っとちよつと待って」

俺は今、恋人である瑞葉の買い物に付き合ってた。

「ああっ、やっぱり……でも……」

どうやらウエストのあたりがきついのか、瑞葉は試着室で一人ぶつぶつとつぶやいている。

「で、涼。なあに？」

「ああ、何でもない」

「あゝ、なんか気になるじゃない」

「……」

「ねえ涼？」

「ん、ああ後で話すよ」

いずれは話さなくてはならない事ではあったのに、ずるずると話をできずに今日まで引き伸ばして来てしまった。

後3日で、俺は日本を離れなくてはならない事を。

「で？」

「ん？」

「ん？　じゃ無くて、さっき言いかけた事って何だったの」

日暮れも過ぎ、食事の後に軽いアルコールが心地よいジャズのスイングと共に取れる行き付けの場所に来ていた。

「もし」

「もし？」

「もし俺が仕事の関係で日本を離れなくてはならないとしたら、瑞葉はどうする」

「え……な、なに」

涼ったらもうお酒がまわったのかしら？　瑞葉はそんな事を考えたのだろう、最初はいつもと変わらない笑顔のまま聞き返してきた。

「何よ涼、そんな冗談……本当、なの？」

瑞葉が俺の表情を読み取って冗談ではない事を知ったのか、急に顔をこわばらせながら真顔になって聞き返してきた。

「3日後に、日本を離れなくてはならない」

「3日!？」

「どうしてそんなに急に? どうして!」

「瑞葉」

「だって」

瑞葉は気が付かないうちに大きな声を出している自分に驚いていた。

「でも、どうして……本当なの？」

「本当だよ」

「それって、前に少しだけ話していた……」

「そう、向こうのスタッフが俺の事を呼んでくれて、2年間向こうに行かなくてはならない」

「2年……」

「だけど、1年である程度の結果を出さなくては2年目はない……けど、もしも向こうの期待以上の仕事をこなせば2年よりも長くなる」

「そう……どうして？なんて、聞かなくても理由が分かって言うのも考え物ね。でも、どうしてもっと早く私に教えてくれなかったの？」

俺がどうしてここまでアメリカ行きを話さなかったかと言う理由も、瑞葉自身が良く分かっている。

しかし、彼女にしてみればそんな理由などどうでも良かったのかもしれない。もっと早く知って、俺と二人でこれからの事を話し合いたかったのに違いなかったのだろう。

俺と瑞葉が最初に出会ったのは、ビルの一角で開かれていた小さな個展の会場だった。

俺はその時、青色の使い方が衝撃的と言う表現があてはまるような、とても印象的な絵の前で20分も立ち止まって見つめていた。とにかく、正確な時間は分からなかったが、ずっと、そう、ずっとその絵から目を離す事が出来ずにいたのだ。

そしてまた、彼女も俺の隣でずっと目を離す事無く見続けていた。

そんな状況の中、俺がふと隣にいる彼女に気が付いた時、彼女の方も俺に気が付いたらしい。自然と目が合った。

その彼女と言うのが瑞葉だった。

その後、他の作品も見ないうちに俺と彼女は会場を離れ、あの絵の事を語りたい気持ちがあったのか、一緒に近くの喫茶店で色々とお話をしたのだ。

そう、あの時は結局別れる間際までお互いの名前すら知らずに、あの印象的な青の使い方をした作品の事、今までに出会った印象的な絵の事などを色々とお話していたのだ。

「あつ！ いけね、もうこんな時間だ。今日は俺、バイトがあつたんだ！」

「えー？ わ、わたしもバイトが」

「……」

「……」

「ぷっ」

「はははっ」

「あははははっ」

何故だか急に2人して笑いが込み上げてきて、周囲の冷たい視線も関係無しに笑い続けてしまった。

「ふう、今日はもう、バイトはいいや」

「ふふ、わたしも」

「でも、本当に印象的な絵だった」

「うん、なんて言うのか、いつも見慣れている青の違う一面を見させられたって言うのかしら」

それからまたあの絵の事を話していたが、今度こそ本当に時間が遅くなってしまい、お互い別れる事になった。

「そうだ、そう言えば名前を聞くの忘れてた」

「あつ、私も」

「あはははっ」

二人はまた笑いあった。

「俺の名前は朝倉涼」

「私の名前は高科瑞葉」

「どこかでまたあえるといいね」

「そうね、でも、またきつとあえる気がするわ」

「それはインスピレーション？」

「そう、かもね」

俺達はお互いの連絡先も教えずに別れる事にした。

そう、あの時は別に知りたいたいと思わなかった。何故だか本当に、直ぐに再開出来る様な気がしていたから……

そして、それは本当になる。

「あれ、君は……高科さんだね」

俺は自分の通っている大学の中で意外な人物を見つけ、一瞬本人かどうか迷ったが、やはりあの時に会った彼女だと判ると思わず声を掛けていた。

「あら、朝倉さん」

女友達と一緒にいたところに急に声が掛かったので、一瞬戸惑いを見せた彼女だったが、俺の事を思い出してくれたのか笑顔で答えてくれた。

「なになに瑞葉あゝ、いつのまに男作ったのよゝ」

「ほゝんと。一番男っ気が無かったのにいゝ」

どうしてこういう時の女性の反応は早いのか、いち早くからかいの声があがる。

「も、もうそんなんじゃ無いってば」

彼女が一応反論をするのだが、こういう時はまったく相手にされないものだ。

「じゃ、私たちは先に行って待つてるけど、来る事は期待してないからごゆっくり」

「あ、そうそう」

「代返は昼食一回分で承っておきますが、いかが？」

「もお！」

「アハハハ、じゃねゝ」

彼女の友達は、俺の方へ向かって軽くウインクをすると、次の講義の教室へと去って行った。

「それにしても」

二人とも同じ事を考えていたのか、同時に同じ言葉を発した。

「フフフツ！」

「ハハツ！」

「それにしても、どこかの美大生だとは思っていたけどまさか同じ大学だったなんて……学科は？」

「うん、私は油専。あなたは？」

「ああ、俺は造形」

「造形？　じゃ何であの個展に？」

うちの大学の油専とは、古典から近代まで幅広い分野の油絵を専

門にする科で、造形とは彫刻から焼き物まで絵画系ではなく立体物を作る科であった。

あの個展は水彩もあったが油彩がメインだった。

だから油専の彼女が居たのは当然の事として、造形の俺が居たのが不思議に思えたのだろう。

「造形の人間が絵画の個展に居たのが不思議かい？」

「うん。別にそういう訳でもないけど、色々と絵画の事も詳しくあったから……でも、やっぱり不思議かな」

「実を言つと俺もそう思う」

「ふふふ」

「でも、よくよく考えてみれば不思議でもないかもね」

「そう、造形の世界だけを勉強していても、それでは造形の世界だけに偏りが出てしまう」

「だから色々な方面の芸術と言われている物を自分なりに吸収していこうと？」

「ま、そんなところ」

「造形では何を？」

「俺？」

「そう、俺」

「俺は焼き専」

「焼きつて言つと……」

彼女の考える時の癖なのだろうか、手であごのあたりを触り目だけ上の方を見ながら考えている。

「陶器や陶磁器だよ」

「そうなんだ」

何だろうか、彼女は、瑞葉は喋る時に何の迷いも無く人の目を見詰めながら喋るんだな……ちよつとこちらの方が恥ずかしくなるく

らい、そう、彼女の目は何だか吸い込まれそうな程にきれいだ。

「き、君は何であの個展に？」

「私？」

「そう、私」

「うゝん、なんでだろ……本当は行く気は無かったんだけど」

「行く気が無かった？」

「講師の先生が教えてくれたんだけど、あんまり印象派って好きになれない物が多くて見に行く事って無かったの。だけど、色の使い方が印象的で見ておいて損にはならないって言われたから」

「でも今は？」

「うん、あの青の使い方は新鮮で、衝撃的とも言うのかしら」

「お互いあの青に魅せられてしまった……か」

「そうね、今でも印象派の絵はあまり好きにはなれないけど、あの絵を見た事によって、何か一つ、自分の中で変りつつあるものがあるわ」

「俺も同じかな」

「創作の糧になる？」

「糧と言うのは良い表現かもしれない」

あの時あの場所で、あの絵に出会わなければ彼女にもであっては
いなかっただろう。

そう考えると少し運命的なものを感じてしまいが、俺と瑞葉が付
き合い出すには必然的なものがあつた。

違う分野ではあつたが、同じ価値観を持つもの同士でお互いがお
互いに影響しあい、良い方向に向かって行ける分、存在価値がか
けがいの無いものへとなっていたのだつた。

「君に今まで話が出来なかった事は悪いと思ってる」
「……私のコンクールまで待ってたの？」

そう、瑞葉は近く行われる絵画のコンクールに出品する絵を、つい最近まで描き続けていたのだ。

だから俺は、少しでも彼女を動揺させるような事を言って、創作に悪い影響を与えないようにしたかった。

瑞葉はあの青い印象派の絵画にであってから、自分の中の創作に関する方向性が見えてきたという。

そして、そんな瑞葉の影響が、俺にとっても最近の創作には前と違ったものを感じられ、徐々にではあったが周囲からも評価されるものを作り出せる様になってきていた。

お互いが良い影響を与えて来た結果と言えよう。

「私、待ってる」

「……」

「二人で良く話したもんね。お互い、自分の夢を実現させる為に最後まで頑張ろうって」

「瑞葉」

「涼、私待ってる。だから……向こうでも頑張ってきて」

彼女なりの強がりなのだろうか、いつものように俺の目をまっすぐに見詰めながら話している。

「ありがとう瑞葉」

俺の事を励ましてくれた瑞葉の目から、大粒の涙がこぼれた。

そして俺は旅立ったのだ……

涼へ

最近こちらでは、寒さが増してきていつ雪が降ってもおかしくない位です。

天気予報では、今年は雪の多い季節になるとか。

そちらの天候はどうでしょうか？

風邪などひかないように体調には気を付けてください。

それから

ps

最近涼からの手紙が減ってきているので少しさびしいです。
お手紙下さい。

俺は日本の瑞葉からの手紙を読み終えると、それをコートの上着にしまってから携帯電話を取りだした。

プルプル……

機械的な呼び出し音が数回なっただけで相手が出る。

「ハイ、高科です」

「瑞葉かい？」

「りよ、涼！ どうしたの？」

「ああ、瑞葉からの手紙を読んでさ、最近俺の方から連絡してな

かったから電話でもしてみようと思ってね」

「本当だよ、最近涼からの手紙が無くてさびしかったんだから……」
「悪かった。色々と手続きなんかが立て込んで、連絡を取り損ねてね」

「……ごめんね」

「ん、何が？」

「連絡が無いからって手紙にさびしいなんて書くの」

「なに言ってるんだよ、そんな事はないよ」

「うん。やっぱり私ってダメね」

「アメリカで頑張ってる涼の事、本当は応援しなくちゃいけないのに」

「そんな事ないって瑞葉」

「……」

「それにしても今日はやけに冷えるな」

「え？ あ、うん。やっぱりそっちも寒いのか？」

「ああ、でも、今日の日本はこっちよりも寒いんじゃないか」

「うーんどうかな、そっちの状況とか解らないから」

「そっちはさ、雪とか降り出しただろ」

「もう、たまに電話してきたと思ったら何で天気の話なの？」

「いいから外を見てみなよ。きれいな雪が降ってるから」

「ちよつと待って、今見てみるから」

「……涼」

「ただいま」

「うん、おかえりなさい」

「家に入れてくれるかい？」

「こんなの反則だよ涼」

あの時と全く変わらない瑞葉の瞳から大粒の涙がこぼれていた。

シーン003：距離（後書き）

ONEの舞台には、雪の日が結構出てきます。

今回のこの「距離」を始め、「色」「瞳」「乙女」などがそうです。

これは、私が四季の中で冬が一番好きだからと言う事が大きく影響しているのですが、特に、雪の降る日の凜とした空気が大好きなので、作中で舞台として用いています。

凜とした空気の中、何かを期待させる雰囲気でもあり、やさしい気持ちにさせてくれる雰囲気でもあり……言葉として表現するのが難しいのですが、雪の降る日と言うのは、好きな日の一日であります。

しかし、近年とみに雪が降らなくなっている関東（私は埼玉県人です）なので、そんな凜とした雰囲気も久しく感じる事が無くなっています。

それに、最近は寒さにも弱くなりましたしね（笑）

シーン004：ワルツ

……ねえ涼……今でも歌ってる

つまらない授業が終わり、学生たちに与えられた特権とも言っべき自由な時間。

放課後

教室にはそれぞれの風景が広がっている。

これから始まるクラブの用意をするもの。

育ち盛りなのか、パンにかじりつくもの。

昨日のテレビの内容を、声を高くして笑いあっているもの。

本当に様々な風景だ。

そして俺はと言えば、いつものようにギターを片手に屋上への階段を登る。

別に学校のクラブでギターをやっている訳ではない

単に歌うことが好きで自分で勝手に屋上を借りて練習をしているのだ。

なにせ自宅では思いっきり弾くことができないし、歌うにしても広いところで大きな声を出して歌った方が気持ちが良い。

だから、俺は屋上へと向かう。

うちの学校の屋上はフェンスがしっかりしていて、学生がいつもでも自由に出入り出来る様になっている。お昼どきなどには結構混

雑するし、時々演劇部などが発声練習などの為に使用する事もあるのだが、基本的に放課後はあまり屋上へ来る者がいない。

だから、一人でギターと歌の練習をするのにはうってつけの場所で、最近では雨の日以外は毎日の様に屋上を使っていた。

最初の頃こそ、俺は有名な曲をコピーしてそれを自分なりの音楽にアレンジしつつ歌っていたのだが、徐々にオリジナルで作詞と作曲をするようになり、最近はどうんと音楽に対しての楽しみと言うものが増してきた気がする。

自分の感じた事を言葉にし、その詩に曲をのせて歌にするのは少々難しい事だが、自分の納得出来る曲が出来たときは最高に楽しい。そして、自分の歌を人に聞いてもらい、何かしらの感情を与えられればと思ってる……

そう、俺からのメッセージ

なーんてカッコつけてるけど、俺の歌を聞きにくる物好きな奴は居ないんだよな、実際。

へへっ

「まあ、掃除もサボってへたくそな歌うたってる！」

ととっ

そうそう、その物好きな奴が一人いた。

幼稚園からの腐れ縁って奴で、高校まで一緒になってしまった高た科瑞葉だ。
かしまみすは

こいつは俺より身長が低く、どう見ても妹と間違われる様な童顔の持ち主だったが、誕生日が2ヶ月近く早いのを良い事に、何かと姉貴風を吹かしてくる口やかましい奴だ。

「なんだよ瑞葉、また俺の歌声を聞きに来たのか？」

「ちよ、なんであんたのヘタツピな歌を聞かなきゃなんないのよ」

「ヘタつて言うなあ」

「じゃあ上手いの？」

むむつ、瑞葉の奴痛いところを……

「おおーマイハニ、何故分かってくれないのかあ」

ジャカジャン！

俺がおちゃらけてギターと共に歌うと

「……」

瑞葉は冷ややかな視線を向けてきた。

「そんな事よりも、掃除は？」

つ、冷て。

「つて、どうせ終わってから来たんだろ？」

「もう、そう言う所だけはしっかりしてるんだから」

良くも悪くも幼なじみと言うわけです。

「だけど、歌に関しては上達しないって言うか……」

「なにい、俺の声に文句を付けようってか？」

「うん」

くっ

「つて、言うか、リズムは良いんだけどね」

「あゝ分かった、分かった。俺の作詞が下手だって言うんだろ」

「まあね」

そう言うつ瑞葉は俺の隣に座り、一枚の紙を俺に差し出してきた。

「何、これ？」

「良いから読んで見てよ」

心なしか瑞葉の顔が赤らんでいる

「フムフム、やさしい木漏れ日の様に、さわやかな……」

やさしい木漏れ日の様に

さわやかな涼風の様に

私の心に語り掛けるのは誰？

透き通る湧き水の様に

ダンスを踊る音の様に

私の心を取りこにするのは誰？

昔観た映画の様に、私をさらうあなたは何処？

何かを待つてる子供の様に、はずむ心がリズムを刻む

待っているのはあなたの心。

二人で奏でるリズムで踊ろう。

「……」

「どう？」

何も言わない俺の顔を、少し不安げに覗き込みながら感想を求めている。

「ああ、まあまあだな」

「まあまあ？」

「いや、ま、何だ、そのな」

「何よぉ」

俺がはつきりとした感想を言わないのが不満なのか、不機嫌そう
だ。

「分かった、分かったよ」

「じゃ、正直に言いなさい」

瑞葉も本当は少々不安なんだろうが、姉御風を吹かして誤魔化し
ている。

「うん、良い感じ」

「ちよつとそれだけ？」

「まあ、俺が歌ってやつても良いかな」

「あゝ、そんな事言っちゃって、本当はすっごく良かったんでしょ
！まったく涼は素直じゃ無いんだから」

まったく、幼馴染とは言え、こつも俺の書きたかった詩を作ってく
るとは……

「どう？ これ歌にしてみてよ」

「あゝちよつとまってる」

「……うん」

瑞葉は、俺の横に座って空を見上げた。

ポロン

俺は一息つくと、瑞葉の詩にリズムを付けて歌いだしていた。
そう、勝手にリズムが浮かんでくると言う感じだろうか。

詩を読んでいる時から、なんだか頭の中に浮かんできたリズムだ
った。

やさしい木漏れ日の様に……

爽やかな涼風のように……

即興ではあったが、まるで昔から歌っていたかの様に浮かぶリズムに、自分でも驚いた。

「どうだ？」

「うん」

それ以上、俺と瑞葉との間に言葉は必要無かった。

あれから3年、俺と瑞葉が高校を卒業してから2年と言う時間が過ぎた。

「ねえねえ、涼君って作曲家になったんでしょ？」

「あ、私も知ってる。あの歌手の曲作ったの涼君でしょ」

「うん、何とか一曲だけ採用されたみたい」

瑞葉は高校を卒業後地元にある大学に進学。

同じ高校から一緒に進学した友達と、講義の合間に話の花を咲かせている。

「でも、涼君って親の反対を押し切って東京で作曲してるんでしょ？」

「うん……」

俺は都内の音楽スクールへ進学したかったが両親の猛反発にあい、半ば勘当の様な形で家を追い出されたので、一人、東京に出てアルバイトをしながら作曲活動を行く事にした。

はつきり言って貧乏生活も良いところで、その日の食費にも困る様な毎日。

だけど、地道な作曲活動が功を奏したのか、有名な歌手の曲を一曲だけ手がける事が出来て、その曲の評判がそこに良かった。そんな事から、少しだけ作曲の仕事に道が開けてきた そんな状況だった。

「なんか、大変らしい」

「なんかって、連絡とか無いの？」

「うーん、最近電話とかも出来ないくらい忙しいみたい」

「えー電話も」

「うん」

さらに二年の時が過ぎ、高校時代の同窓会が開かれて懐かしい校舎のおいをかく。

やさしい木漏れ日の様に

さわやかな涼風の様に

私の心に語り掛けるのは誰？

透き通る湧き水の様に

ダンスを踊る音の様に

私の心を取りこにするのは誰？

昔観た映画の様に、私をさらうあなたは何処？

何かを待ってる子供の様に、はずむ心がリズムを刻む

待っているのはあなたの心。

二人で奏でるリズムで踊ろう。

「よ、瑞葉」

「涼……」

「最近はお人の曲を作ってるけど、俺自身も歌ってるんだぜ」

「曲は良いんだけどね」

アハハハハ

二人して同時に笑いが込み上げる。

「どうですお嬢さん、二人で奏でるリズムで一緒に踊ってくださいませんか」

俺は彼女をエスコートする為に手を差し出した

そして、しばしの沈黙

「喜んで」

あの頃と変わらない瑞葉の笑顔だった。

シーン005：化粧

飲み会が終わると、いつも「あの」嫌な感情が首をもたげて自分を襲って来る……そう、自分の存在が偽りなのではないかと言うあの嫌な感情。

「瑞葉ちゃんってもったいないよね」

「え？」

それは、帰る方向が同じだからと、知り合いの男の子が車で送ってくれていた最中の事だった。

私は少々酔いが回っていたのか、それともあの嫌な感情に支配されていたのか、男の言葉を良く聞き取れなかったので「ごめんなさい、良く聞き取れなかったんだけど」と、素直に聞き返していた。

「ああごめん、何か考え事でもしてた？」

男は気を悪くするでもなく、私の事を気遣ってくれた。

「うん、何でも無いの」

……
本当は、あの嫌な感情に支配され始め、自分の心の中が絞めつぶされてしまうかの様な、そんな状況に陥りつつあったのだけれども

男の名前は朝倉涼と言う。

中学時代と同じクラスになった事もある人……だからこそ、あの嫌な感情が強くよみがえっているのかもしれない。

「それで、さっきの話だけ」

「うん、気を悪くしないで欲しいんだけど……」

と、男はいったん言葉を切ると、何か踏ん切りを付けた感じで話

し出した。

「瑞葉ちゃんってさ、化粧が結構下手だなと思ってね……」

私は突然の言われようとお酒の為か、最初彼が何を思っ言っているのか理解出来なかった。と言うよりも、この言葉だけでは誰もが自分の化粧の仕方が下手な事を言われているとは思えないだろう。

私が、自分のことを馬鹿にされたと思ったのも無理は無い。

「ちょ、それって、ちよつと失礼なんじゃないの」

「あ、ごめん、化粧って、そう言う意味じゃなくて」

「その他にどんな意味があるっていうの」

「うーん、なんて言ったらいいのかな、今時こんな事を言ったりするとセクハラって言われそうだけど、俺は基本的に女の子って笑っているだけで、凄い素敵だと思うんだ……だからどうしてみんなは化粧をしまうのかなってね」

「……」

「いや女の子に限った事じゃないんだけどさ、人間って本当に笑える事の出来る人程、光ってるって言うかさ、他に何もいらなと思えるんだ」

「じゃあ、今の私には光るものが無いって言うの？化粧をしなくちゃ誰も私の事なんか見向きもしないじゃない。一体あなたに私の何が解るって言うのよ！」

私の頭の中に、昔の嫌な記憶がよみがえって来た。

中学生の時、私には好きな人がいた。

同じクラスの男の子で、勉強もスポーツもできて、男の子の中では中心的な存在の人だった。私はそんな彼に、自分の持てる全ての

勇気を振り絞って告白をした事がある。

結果は期待していなかったと言えは嘘になるが、無理な事だと解っていて、それでも私は告白して自分の気持ちを知ってもらおうと思ったのだ。

「あなたの事が好きです……良かったら、私とお付き合ってもらえませんか？」

「え？」

一瞬、私の言葉にその男の子が困った顔をしたのを見て、私は辛い結果になるであろうと悟った。断られる　でも、私は私の気持ちを知って欲しかった。

私は次に来る言葉を待った。それが私にとって辛い結果となることも

しかし、次に発した男の子の言葉は、私自身の存在が否定されているくらいの大きな衝撃だった。

「ごめん、名前なんだっけ？」

同じクラスで有りながら、名前すら覚えてもらえていなかったのだ……

そう、私はあの時、あの嫌な出来事から自分を変えた。

もっと自分を変えれば、目立つ存在になれば、周りの人間はもっと自分を見てくれるはず、そんな気持ちから私は、軽いノリの女の子を演じる様になったのだ。

「ごめん、俺には君の心までは理解できないよ」

「だったらなんでそんな事言うのよ。私のどこがいけないのよ!!」
「でも　でも何だか時々辛そうに見えるから」

！

「今の君を見ているとね、化粧をするのに疲れているんじゃないかって思えてくるんだ。もちろん僕の勝手な想像ではあるけど昔、瑞葉ちゃんと同じクラスになった時があっただけど覚えてる？」

みんなが面倒だと言ってやりたがらなかった美化委員の仕事を、君は押し付けられた格好でやる事になったよね。本当はもう一人の美化委員の奴と交代での仕事だったのに、君は毎日の様に朝早く来ては、花壇の花に水をあげていた」

「そんなこと……良く覚えてるのね」

「俺はバスケの朝練があっただから、たまに君の姿を見掛ける事があったんだ」

「その時一度、ボールが体育館の外に飛んでいって、君がそれを拾ってくれた事があったの覚えてる？」

男は、瑞葉が何も言い返してこないの、キチンと聞いてくれているか不安に思ったらしかったが、落ち着いた口調で話を続ける。

「君がさ、頑張ってたねって、笑顔で言ってくれた時の顔が忘れられなくてさ」

男は照れくさそうに頭を掻きながら

「実はさ俺、中学の時から君の事が好きだったんだ」

私はこの男の意外な言葉に戸惑いを感じずにはいらなかった。

私が化粧をしている事を……彼は理解していて、そして、その内側の私にも気が付いてくれていた。

そう思っただけで私は

私のひとみからは次から次へと大粒の涙が零れ落ちてきた。

どうして、どうして私は化粧をする様になってしまったのだろう

.....

私は、私自身に嘘を付いていた。

私は、私自身を裏切っていたのかも知れない。

私は今日

流れ落ちる大粒の涙で化粧を落とします。

シーン006：瞳

その女の子は、制服を着ているところを見ると高校生だろうか。

長年のものによる自然な日焼けだろう、褐色の肌が実に良く似合っていて、さらさらな髪をショートにまとめているのが健康な感じを受ける。

一体 彼女は何を見つめているのだろうか？

その女の子は、決して人の通りが少なくない道の真ん中で立ち止まり、じっと、じっと何かを待っているかのように空を見上げていた。

空は、午後から出てきた灰色の厚い雲に覆われ、今にも雨が落ちてきそうな様子だったが、これと言って特に変わった様子は無い。

いや、この寒さを考えると雪になるかも知れないな……

ここ最近の冷え込みはそう思わせるのに十分な寒さで、道ゆく人の服装を見てもそれが伺える。

俺はそんな寒さも気にせずに、どんよりと曇った空を見上げ続けている女の子が、妙に気にかかってしょうがなかった……

そして、もう一度その女の子の方へ目を向けようとした。

すると、思ったとおり、空からはちらほらと白いものが舞い降りて来る。

この辺も、昔は積もる位に降った雪だったのに　俺は近頃あまり見る事が出来ない雪に、少々新鮮な感じを覚えていた。

そうか……やっぱり彼女はこれ wait っていたのかも知れない。

そう思い、俺は再び彼女の方へ目を向けると、一瞬だったが彼女の瞳と出逢った気がした。

「おい、信号青だぜ！」

「あ、ああっ」

いつのまにか信号が青に変っていたらしく、友達が立ち止まったままの俺を見て不思議そうな顔をしている。

「おっ、雪が降ってきたぜ。寒いから早く帰ろうぜ」

「そうだな……」

俺はそう答えながらも、もう一度だけ振り返って見たのだが、そこには既に、女の子の姿は無かった

あの時、一瞬だけ出逢った彼女の瞳には、天使の羽根が写っていた　そんな気がした。

シーン007：遠い海

大きな波を求めて、サーフィンのボードを片手に海を見つめるあなたの瞳には、私の姿は映っていませんでしたね……

海はこんなにも近くにあるのに、それを見つめるあなたとの距離は
少しだけ

そう、少しだけ遠く……感じられました。

彼の名前は朝倉涼さん。

出会いは、体調を崩して寝込んでしまった親戚のかわりに、海辺にある民宿を手伝った事だった。

彼は夏休みを利用して、民宿で働きながら暇な時間にサーフィンをやりに来ていた大学生。

なんでも親戚が、今時の大学生にしては珍しいほど真面目に働く彼をとても気に入って、昨年が続いて雇ったそうです。

私から見ても彼はすごく真面目だったし、いつも笑顔を忘れないとてもやさしい印象の人でした。

でも、彼が一番真面目にしていたのは、サーフィンをやっている時。

普段は、私やたまに遊びに来る友達を相手に大学での色々楽しい話をしてくれたり、いつもやさしさを感じさせてくれる彼だったけど、ボードを片手に海を見詰めるその瞳には、殺気のようなものさえ感じられました。

普段はあんなに優しい瞳の彼が、どうして波に対して殺気のような表情を見せるのか不思議なくらい　そう、真剣に波に取り組むにしては「真剣すぎる」様に思えるほどだったのです。

しかし、私はその事を聞くのをためらっていました。
何か、聞いてはいけない事のように思え、聞けなかったと言った方が正しいかもしれません。

けれども、幸か不幸か、その理由は意外と早く知る事になってしまいました。

そして私は、その理由を知った事によって、彼にどう接して良いのか……わからなくなってしまったのです。

「もう、いいんじゃないのか？」

私が今日帰っていったお客さんの部屋を掃除していると、隣の部屋から、涼さんと涼さんを訪ねてきたと言う友人の方との会話が聞こえてきました。

別に盗み聞きをするつもりではありませんでしたが、民宿の部屋などうす壁一つしかなくて、普通の話し声でも聞こえてしまうのです。自然、耳を傾ける形になってしまいました。

「もう、あいつの事は忘れろ、それがあいつのためだしお前の為で

「もあると、俺は思う」

あいつ？

「何を言ってるんだよ、あいつの事を忘れられる訳がないだろ……」
彼はいつもの明るさからは想像もできない程、切ない声で答えていました。

「涼が、いつまでもあいつの事を忘れないでいてくれるのはありがたいと思う。だけど、お前まで海で死んでしまうような事にはなつて欲しくないんだ」

私は、彼の友人という人の言葉を考えました。

あいつ？

海で……死ぬ？

「もう、サーフィンなんてやめてくれ。俺は」

「何を言ってるんだよ……俺は、沙智子の好きだったサーフィンで、沙智子を感じた事のすべてを知っておきたいんだよ」

「だからって」

私はその瞬間、すべてを悟ったのです。

彼が海に投げかける視線の理由、その悲しい理由を。

「やあ、瑞葉ちゃん」

「あ、朝倉さん……」

「ん？どうしたんだい、なんか暗い顔しているけど」

「い、いえ、なんでもないんです」

と言いながらも、私は彼の事を直視するのが辛かった。

だけれども、彼が感じている辛さは私の感じている辛さなどには比べるべくもないでしょう。

彼は、彼の大事な人を海の事故で失っているのだから……

私は、彼の中に私がない事や、彼の一番大切にしている人がいて、その人が既にこの世にいない事。そして私が、その人の変わりにならない事が……とても悲しくて、とても辛くて

とても

とても

切なくて

「どうしたんだい、瑞葉ちゃん！」

私はそんな気持ちに耐えられなくて、涙を押さえ切れませんでした。

「私は、私には涼さんの悲しみをなくす事が出来ませんか？」

「……」

その時彼は、一瞬驚きの表情を見せましたが、悲しいまでに優しい顔で、私の顔を見つめながら答えてくれました。

「そうか……話を聞いていたんだね」

そう言うと彼は、悲しい記憶をひも解くように、ゆっくりと話をしてくれました。

「そう、あれは一昨年の夏、吹く風に夏の終わりを感ぜられる頃の出来事だったよ」

「危ない!!」

俺がそう叫ぶと同時に、ボードに乗っていた彼女がバランスを崩して宙に舞った。

「おい！ 今落ちた娘、ボードに頭を打ち付けていたぞ!!」

「本当か？ それでボードから落ちた娘は」

「まだ、まだ出てこないぞ」

「ライフガード早く!!」

俺の彼女である沙智子は、自分が先にトライしていた波に、覚えてたのボディボードをやっていた若者が横から入って来たのを見て避けようとし、バランスを崩してしまった。そして、サーフィンのボードへとしたたかに頭を打ち付けて、その体を海へと投げ出されていたのである。

砂浜が俄にあわただしくなり、ライフガードの数名がボートを担ぎながら海へと向かっていたが、俺はそんなライフセイバー達よりも早く海へと飛込むと、沙智子を助ける為に必死に泳いでいた。

波の力と言うものを、あの時程に思い知らされた事はなかった。

一度は浮いて来た沙智子の体が見えたものの、なかなかそこまでたどり着く事が出来ずに、もどかしい思いが先走るばかりだったのを覚えている。

「あと、あと少し、あと少しで……」

しかし、俺があと少しで沙智子の体に触れると言うところで、沙智子の体は深い暗闇の中へと沈んで行った。俺は、沈みゆく沙智子を助けようと、必死で潜って体をつかもうとしたけど、海の力はそれを許してくれなかった。

「その後、俺は力尽きて意識を失い、沙智子と共に暗闇の中へと沈みかけた。だけど、俺は後から来たライフガードに助けられ、近くの病院へと担ぎ込まれたんだ。結局、その時に沙智子も引き上げられたらしいけど、首の骨が折れていて即死の状態だったらしい……」

彼はそこまで言うと、目をつぶって天を仰ぎながらこう続けた。

「沙智子の死に顔は、本当に良い表情をしていたよ……顔にはうつすらと笑みさえ感じられるかの様な顔だった」

「それで、涼さんは沙智子さんの好きだったサーフィンを始めたんですか」

「そう、俺は最初、海を憎んだよ。沙智子を奪ったこの大きな自然を。だけど……沙智子が好きだったのも、この大きな自然を感じられる海だと気が付いたんだ。そして、俺もこの体に大きな自然の力を刻み付けておこうと思い直したんだ」

辛い思い出を昔話に出来ない涼さんの顔には、沙智子さんへの一途なまでの思いが感じられ、私にはどうする事も出来ないのではないかと思えました。

でも

「でも、涼さんまで海で死んでしまう様な事は、沙智子さんも望んでいないはずです」

私は私の思った事を、素直に話すしかない………思った。

「ありがとう」

………

その時の涼さんの顔には、どこか、私を大きく包み込んでくれる海のように、私を安心させてくれる、そんな顔をしていましたけれど

「まだ、沙智子の事を忘れられないのは事実だけれど、俺は沙智子の愛したこの海では絶対に死ぬ気はないよ。沙智子の愛したこの海だから………」

私は、そんな風に思っている涼さんの存在が、少しだけ遠く感じられました。

海は、こんなにも近くにあるのに、それを見つめるあなたとの距離が………もの凄く遠く　　本当に遠く感じられる。

だけれども

「私は涼さんの事が好きでした
そしてこれからも、この想いは続くとします」

シーン008：風歌う

風の吹きだまりと呼ばれる場所があるが、この場所はまさにそんな場所なのかもしれない。

季節的には3月と言う事もあって最近まで少々肌寒さが残っていたのだが、今日は朝から雲一つない位に晴れ上がり、優しい風が暖かな陽気を演出している。

だからと言う訳でもないが、俺はそんな陽気に誘われるかのように、日のあたる川辺りで腕枕をしながら寝転がっていた。ここは、吹く風が一度くると踊る様にして消えてゆき、それが妙に肌をなでて行くので気持ちが良い。

川辺りに生えている草の匂いも嫌いじゃない。

元々風景の写真を撮りたくてカメラの専門学校を出たくらいだから、こう言った小さな自然でもそれを肌で感じられるのがとてもうれしい。

しかし……良い天気だ。

最近の俺は、仕事の事などで色々と悩んでいたりしたのだが、この陽気の中で小さな自然を感じながら寝転がっている内に、もう考えるのがばかしくなってきた。

とは言うものの、やっぱり俺の頭の中には仕事の事がいっぱいなのも事実なんだけどね。

「写真で飯が食えるのか！」

俺が写真の専門学校に行くと言ったとき、こう言って猛反対したのは親父だった。しかも、家族全員が親父と同じ意見だったのを、忘れる事が出来ない。

結局俺は家を出て安いアパートを探し、学費も生活費もアルバイトで賄いながら学校に通った。

あれから俺は、一度も実家に帰っていない。

もちろん、貧乏である事は言うまでもなかった。けれども、それを一度たりとも後悔した事はない。

一人暮らしにしても学校での生活にしても、それなりに楽しかった。

それに、相棒と言うべきカメラを購入したのは、この貧乏生活のどん底の時期で、今でも自分が一番大切な写真を撮る時はこのカメラを使うことに決めている。

プロが使用するカメラとしては少々……いや、だいぶ安物の部類に入るカメラだったが、俺に取っては貧乏時代を共にした、そう、信頼できる相棒と呼べるカメラはこいつだけだった。

そして、俺はそのカメラと共に色々な場所に出かけては、その土地の風景を写真に撮りたかった。

別に人物が嫌だった訳では無いが、春には春の、夏には夏の、秋や冬には、それぞれの顔を見せる季節と言つものを写真を通して知ってもらいたかった。

だから、どうしても風景画を撮りたかったのだ。

しかし、それこそ専門学校を出たばかりの無名の新人が、すぐに

食べて行ける程甘い世界ではなかったし、今の貧乏生活ではフィルムを買う金もままならなかったので、現場の厳しさを知る事とある程度の人脈を作る為に、今の師にアシスタントとして付いて学ぶ事にした。

有名な師に付く事も難しい業界で、少なからず力を持っていた今の師に師事出来たのは恵まれていたのかもしれない。

ただ、俺が師事した人の専門は風景では無く、いわゆるスタジオでの人物撮影を専門にし、どちらかと言えば、広告会社との太いパイプを大事にするタイプの人だった。

確かに、人物は難しい。

モデルさんが一瞬だけ見せる最高の表情を引き出すのも、カメラマンの腕一つと言う世界。

しかし、俺の師事している人は広告代理店との付き合いを重視し、撮影以外での付き合いが多く、夜のお供としてタクシーでの送り迎えなどは当たり前。それでも自分にプラスになればと思って仕事をこなしてはいたが……その割に、カメラの技術向上に対しては得るものが少なかった様に思う。

だから 俺はそんな現状に嫌気が差し、ここ最近休みをもらって風景を撮りに出かけていたのだ。

そして、本当ならば今日から仕事に復帰する予定だったのだが……

俺は風景写真を撮りに行って自分自身に失望していた。

どんなに時間が空いても、俺は俺が最高と思える風景写真を撮れると思っていたのに 実際はそうじゃ無かった。

取りあえず生活をするために、取りあえず名前を売るために、取りあえず……そんな風に自分の心をごまかしながら仕事をしていく

内に、自分の中にあつた情熱が徐々に薄れ、そして、何を撮りたかつたのかも忘れてしまった事に、気が付かされたのだ。

俺は、何をしたかつたんだろう

小さな水の流れ、厳しい夏の日差しを和らげてくれる木々と葉、苦勞して登つた山の途中で見せてくれる花々の装い……そんな自然を感じられる写真。水の冷たさや、葉の擦れ合う音、花々の匂いすら感じられる写真。俺はそんな写真を撮りたくてこの道に入ったのに……

クンクン……

そう、こつやつてクンクンと匂いを嗅げばそれを感じられる様な写真を……

クンクン……

そう、クンクンって？

耳元で妙に生暖かい鼻息の様なものを感じたと思ったら、次には鼻先に

ベロン！

と、妙な生暖かい感覚が走つた。

「うわあ、何だ！」

俺が飛び起きて隣を見ると、そこには一匹の大きな犬が興味深そうな顔をしてこちらを覗いていた。

犬種は今流行のラブラドルだろうか？

嬉しさを一生懸命にしつぽで表現しているところにお茶目さを感じる。

「おい、おまえさんの飼い主はどこにいるんだ？」

と、馬鹿みたいだなと思いつつも、その犬に向かって問い掛けてみる。

すると、少し離れた土手の上を

「こら、ラッキー。勝手に先に行っちゃ駄目じゃないの」

と、小走りに走ってくる女性の姿が見えた。

それを知ってか知らずか、女性の言葉に我関せずと言った顔をしているこいつは、結構とぼけた犬なのかも知れない　　オレがそんな事を思っていたら、今度は鼻を擦り付けるかのようにしてのしかかってきた。

「どわあゝ」

上半身を起こしたばかりの不安定な姿勢だったので、その犬の思わぬ攻撃に耐えられない。思わずその重さに倒れると、ラッキーは今だと言いたげに顔中をなめてきた。

「おわつ、ラッキーやめろって」

必死に抵抗を試みるのだが、何せ体勢が悪くてうまく防げない。

しかもラッキーは、俺の抵抗を遊んでいると思ったのかますます激しくじゃれて来る。

「はゝ、はゝ、す、すいません。こ、こらラッキー、駄目じゃない、は、な、ね、な、さい」

と、ラッキーを必死に引きはがそうとする女性は、走ってきたからか息を切らしている。そんな女性のかいも虚しく、既にオレの顔はラッキーの愛情表現にぬれぬれになっていた。

「うわ、べたべただ……」

やっと起き上がる事が出来たオレは、べと付く感触に

顔に

愛情も考え物だななどと思ってしまう。

「す、すいません。ちょっとロープを離れた隙に勝手に走り回ってしまつて」

その女性は土手を走つて来たからか、顔を上気させながら

「あの、よろしかったらこれ使つて下さい」

と、言つてハンカチを差し出して来た。

見れば清潔感の漂う真新しいハンカチだったので、一瞬借りるのを躊躇つたが……何とも言えない顔のべたつきを思うと、素直に女性の好意に甘える事にする

「すいません」

別にこちらが悪いという訳でも無いのだが、何故だが謝つてしまふのは日本人だからか？

あれ？この香り

俺は女性から借りたハンカチで顔を拭い始めたのだが、そのハンカチから微かに、少し甘つたるい様な匂いを感じた。

そつだ、匂い袋の様な匂いだ……

俺に取つて匂い袋の香りとは、淡い思い出の記憶と共に懐かしさを感じられるものであつた。

その昔、俺がまだまだ小さくて、小学生になるかならない頃だったが、京都に住んでいた事があつた。そしてその時の知り合いに、芸者さんがいた。

俺の初恋の人だつた

「涼君、そないにこの匂い袋が気に入ったん？」

その芸者さんは俺の家の裏にあった置屋にいた人で、俺が遊びに行くのと、嫌な顔一つせずに良く相手をしてくれる人だった。

そしてある時、その芸者さんが持っていた匂い袋を貰った事がある。

「良い匂いや」

俺は幼いなりにその芸者さんの事が好きで好きでしようがなく、いつもべったりしていたのだが、ふと芸奴さんから匂ってくる甘い様な匂いの事を聞いた事がある。

その時

「これなあ、匂い袋いうて良い匂いしはるんよ」

と言って、その芸者さんは俺に匂い袋を渡してくれた。

俺はいつぺんにその匂い袋の匂いが好きになった。

なぜならば、大好きなその芸者さんを身近に感じられるような気がして、とても良い気分だったからだ。

「そないに気に入ったんなら、涼君にあげるわ」

その芸者さんにしてみれば数ある匂い袋の一つだったのだろう、俺がいつまでも手に持って匂いをかいでいたら、その匂い袋をくれる事になった。

「ええのん」

「大切にしてな」

「おおきに」

あの時の俺はともうれしくて、周りの同い年の友達から随分とからかわれながらも、しばらくの間ずっと肌身離さず身につけていた記憶がある。

そう言えば、俺が写真を撮りたいと思ったきっかけはその芸者さんの一言からだったっけ……

「涼君は写真は好き」

「うん」

その芸者さんは、俺に一枚の写真を見せてくれながら聞いてきた。多分、幼い俺にまともな答えを期待したわけではないだろうが、その芸者さんは少し物憂げな顔をしながら話してくれた。

「この場所な、うちがすんどった所なんやけど、今は水の中に沈んでもうたんよ、ダムを作るんいうてね。だから、あの頃の景色はもうこの写真でしかみれへんの」

「さびしん？」

「そやね、でも、この写真があるからへいきなんよ」

「写真」

「そや、この写真はうちの父ちゃんが撮ったんやけど、あの場所の匂いすら感じられる良い写真なんよ」

あの時の俺にはあまり良く分からなかったが、漠然と思った事がある。

それは何ともない一枚の風景写真だったが、それが人にかけてえの無い思い出を残してくれて、そしてその人の大きな支えになるのだと。

そっだ……どうして忘れてたんだろう。

俺はその時から、風景写真を撮りたいと思う様になったんだ。

女性が貸してくれたハンカチからは、その時の匂い袋の香りと同じような香りがしていたので、つい俺が懐かしさを感じてしまったのも仕方が無い事であろう。

そう、あの時の純粋な気持ちを思い出させてくれる、そんな匂いだったのだから

「あの」

「あの」

と、お互いの声が重なった。

一瞬間を見合ってからお互いに笑いあってしまった。

ははっ

クスクス

「どうぞ」

本当におかしそうに笑っている彼女に質問の主導権を譲る。

「いいんですか」

彼女はそう言っと、俺の横に置いてあったアルミケースを見て

「写真をお撮りにになるんですか？」

と聞いてきた。

そう言えば、仕事に行くつもりだったからカメラのケースを横に置いてたまだった。彼女はドラマか何かでこういう入れ物がカメラマンの物であると知っていたのかもしれない。

俺はそう思いながら

「ええ、少しばかり真似事を」と答える。

別に謙遜してこんな言い方をした訳ではなかったが、スタジオカメランとして既に2年以上の経験があっても、自分の本当に撮りたかった風景写真に関して実に素人であると痛感していただけにこう答えてしまったのかも知れない。

「あら、でも結構本格的にやってるんじゃないんですか？」

彼女は俺の器材を見て、素人以上の物であると感じたのだろうか？確かに、素人が持つ物としては仰々しい感じの物である。

「ええ、本当はプロとして結構有名なんですよ」

俺はプロとして別に有名でも何でもなかったが、こう言う時は大袈裟に言った方が信じてもらえないと思った。

まあ本当の所、別にどちらでも構わないのだが。

しかし彼女は、俺の言った事を本気にしたのか

「へー、そうなんですか」

と言って、俺へ尊敬のまなざしを向けてくる。

「将来の……と言う言葉が、一番最初に付きますけど」

人の事を素直に信じてしまう人を騙す様な事はしたくない。

俺は慌てて訂正した。

「え？」

言葉の意味がすぐには分からなかったのか、一瞬キョトンとした表情は見ていて面白かった。

「いやだから、将来プロとして有名になれば良いなあーなんてね」
その言葉で全てが解ったのか、彼女が屈託の無い笑顔を見せながら笑いだす。

「あははっ」

そんな彼女の表情は、本当に楽しそうで……そして、素敵だ。

スタジオの中の被写体には見られない、素敵な笑顔を持つ彼女に
俺は

「一枚写真を撮りましたよ？」

思わず言葉が出た瞬間だった。

シーン009：乙女

ディスプレイとして置いてあるテレビからは、着物を着た女性が袖をたくし上げ、腕に力こぶを作りながら

「恋せよ乙女！力こぶ」

と、キャッチフレーズを言っている声が聞こえてきた。

「何だろこれ……」

私はテレビCMにふと目が行っていた。

「最近じゃ、やっぱり乙女も積極的に恋をしろって事かしら。力づくでも？」

私は自分で随分的外れな考えだと思いながらも、待ち合わせの場所へと向う事にした。

「しかし、最近の私はそう言う事に飢えてんのよね。実際」

そう、私は飢えていた。

と言っても、別にいやらしい事に飢えている訳ではない。

まあ、成り行きでそうなるのは期待していないわけじゃ無いけど、むしろそんな付き合いではなく、もっとこう、燃える様な情熱のある恋や浪漫のある純粋な恋愛と言うものを作りたいと思っている。

つまり私は 乙女チックな恋と言うものに飢えていたのだ。

「な〜に言ってるのよ。熱でもあるんじゃない？」

私が乙女チックな恋に飢えていると言ったら、友達の智子からはこんな返事が返ってきた。

ま、確かに笑われるとは思っていたけど、これ程ハッキリ言われ

ると少々腹が立つ。

「でも、やっぱり恋をするのにもこう、なんだか……」

「胸キュンってやつ？」

「む、胸キュン？……古いわね」

「い、いいじゃない……」

「でもね、やっぱり何かを感じたいじゃない」

「はいはい、あんたはそうやってずっつと胸キュンの恋が出来るまで待つてなさい。そのかわり……」

智子は目を細めながら

「花の命は短いわよ」

と付け加えた。

「はあ、そうなのよね」

「おやおや、ため息が出るなんて、やっぱり花の命は短いわね」

「って、智子だって同い年でしょ！もう」

私と智子は二人して大きな口を開けて笑い出した。

「箸が転がってもおかしい年齢」と言われる年はとくに過ぎてはいるのだけれども、そんな事はお構いなしだ。

「でも、あんたがそんな事言ってるんじゃ、このお誘いは無しにしようかな」

「なにになに？」

「T大のスキー同好会との合コン」

「えっ！なにそれ、行く行く行く！」

あれ程ロマンだの情熱だのと言っていた私の変わりように、智子はあきれたと言った顔で

「で、そこ行く可憐なお嬢さん、ロマンと情熱はいかがいたしましたか？」

と聞いてきたので、私は素知らぬ顔でこう答える。

「その日だけはね、乙女心に目隠しするから大丈夫なの」

それを見た智子は、やれやれと言った顔をしながら

「おぬしも俗物よの」

と言って笑った。

私は、いつもならギリギリか少し遅れるのが常なのに、今日に限って待ち合わせの場所に20分も早く付いてしまった。

「このお花屋さんの前で良かったんだっけ？」

智子のアルバイト先から近く、駅へ向かうにもちょうど良いからと、一軒の、お洒落な感じの花屋さんの前で待ち合わせをする事になった。

もちろん、この前話していた合コンのためである。

「今日は乙女心に目隠しして、良い男をGETしなくちゃ」

乙女チックな恋に飢えていると言っていたのに、私も現金なやつだと思うが、合コンとは言え、素敵な出会いが出来るかもしれない。チャンスは、大切にしなくちゃ……と思う。

「だけど、これだけ早いと暇よね」お花屋さんでものぞいてみようかしら？」

私は自慢ではないが、人を待たせる事は得意なのだが、待つ事はまったく慣れていない。

こんな性格だから「浪漫」や「情熱的」と言った恋が出来ないのだろうか？

そんな事を考えつつも、今ここで何もせずに待っていると言うの

はやはり落ち着かない。結局買っ当ても無いままにそのフラワーショップへと入る事にしたのは、そんな些細な理由からだった。

ガラスの扉を開けて中に入ると、最初に出迎えてくれたのはむせ返るような花々の匂いだった。あまりにも数が多いからか、良い香りと言うよりも、やはり、むせ返る様な匂いと言った表現をしたくなる。

しかし、種々様々な彩りは見ていて心が和む。私はそんな花々の饗宴を楽しもうと店内に入ったのだが、一番最初に目に付いたのは一人の男の人だった。

店内の客がほとんど女性ばかりだからか、その男の人は少し恥ずかしそうにしながら鉢植えの花を選んでいる様に見える。

彼女へのプレゼントかしら？

でも、彼女へのプレゼントに鉢植えの花を贈るのも珍しいわよね……自分の部屋にでも飾るのかしら？

私が勝手な想像を働かせていると、男の人は気に入った花を見つける事が出来たのか、一つの鉢を手に取ってレジの方へ向かうと、二三、店員と話をしながらお金を払い、袋に入れて貰った鉢植えの花を大切そうに抱えながら店を出ていった。

あれ？

そう言えば今気が付いたけど

「先輩、鈴木先輩ですか？」

私は、フラワーショップでレジを打っていた人が、高校時代の先輩だと言う事に気が付いた。

「あら、久しぶり！どうしたのこんな所で」

「ああ良かった、やっぱり先輩だったんですね」
彼女は高校時代、クラブが一緒に凄く仲が良くなった先輩の一人だった。

卒業し、どこかの大学に進んだと言う事は聞いていたのだが、高校を卒業して以来会っていなかったので懐かしかった。

そして当然の如く、フラワーショップの中に話の花が咲いた。

「そうそう、あの時はボロボロ大粒の涙こぼして泣いてくれたもんね」

「もうやだな先輩。今言われると恥ずかしいんですよ」

「あははは、でもうれしかったんだから……」

先輩と話をしていると、高校時代の思い出が次々と蘇ってきて、懐かしさと共にとても楽しかった。

私は、こんな偶然があるのなら「たまには待ち合わせに早く来るのも良いかな」などと、調子の良い事を考えてしまう。

それはさておき、高校を卒業してから何年も経っていないのに、久しぶりに会った先輩との昔話は、本当に楽しくていつまでも続きそうな勢いだった。

けれども、私の頭の中にはある一つの事が気に掛かっていて、その事を聞きたいと言う衝動が強かった。それは

「あの、そう言えば先輩。さっきここで男の人が鉢植えの花を買っていきましたよね。お知り合いなんですか？」

私は思いきって、それでもさりげなく聞いていた。

「え、あゝ涼君の事？」

「涼って言うんですか」

「ええ、さっき鉢植えごと花を買っていった人でしょ。大学の友達なのよ」

先輩はそう言うと、お客さんが一人来たので手早くレジを済ませ
てからこう続けた。

「なに、興味あるの？」

「え、いえいえ」

私は大きくかぶりを振ったが、内心は気になってしょうがなかつ
た。

そう、私はこのフラワーショップへ入ってきた瞬間から、そ
の人の事が気に掛かっていたのだ。

「いやあ、男が鉢植えなんか買って何をするのかなって……」

少々苦しい言い訳の気がしないでも無いが、その事を本当に疑問
に思ったのも事実だった。

「ああ、あれはね、彼女の為に買っていたのよ……」

私の何気ない言葉に、いつも歯切れの良い物言いの先輩が、妙に
語尾を濁らせる。

「何か、あるんですか？」

「ん？うーん、ちょっとした不幸と言うか」

その後先輩から聞かされた話はこうだった。

もう一年も前の頃らしい、季節的には今ごろ。

ここらへんでは珍しく雪の積もった日に、さっきの人の彼女が交
通事故にあつて視力を失ったと言うのだ。

しかし、その彼女の視力障害は心因性のもので、いつかは視力が
回復するかも知れないし、このまま視力が戻らないかも知れないと
言う。

そこで、涼と言う人はその彼女の為に、彼女の「見たい」と言う

気持ちが起こりそうな物事を探しては、色々と彼女の所へ持つて行っているらしい。

いつかは視力が回復すると信じて……

だから、今日買つていった花も、少し香りの強い物を選んで買つていったのだそうだ。

「でも、鉢植えなんて珍しいですね。普通なら切り花の　たとえバラとかを買つていきそうなのに」

「そうね、でも彼、涼君は、切り花は花を殺している見たいで嫌なんだつて。鉢植えなら手入れをしていれば毎年花が咲くからそっちの方が良いだろうつて、テレながら。それに、彼女も鉢植えの方が喜ぶだろうつからとか言つてたわ」

……

……

…

何故だろう……　なんか、こつ……

「ゴメン、待つた？」

バイトが長引いたのか、智子は待ち合わの時間に少し遅れてやつてきた。

「ううん、でも」

「でも？」

「ゴメン、今日はキャンセルするわ」

「えゝ、どたキャン?!」

「ゴメン、この埋め合わせはいつかするから」

「だって、丁大だよ。めったに無いかも知れないんだよ……」
「ゴメン」

私は戸惑う智子をよそに、合コンをキャンセルして家に帰る事にした。

その途中

「あ、雪だ……」
どんよりと曇った空からは、ひらひらと白いものが舞い落ちてきた。

「恋せよ乙女……か」

私の手には、鉢植えの花が握られている。

シーン010：キス（前書き）

この作品は、キスを題材としたワンシーンです。物語というよりも詩に近い作品です。ですが、ONE SCENE STORYという作品には必要となると思いますので、シリーズを通りして読んでくださっている方には、読んで頂きたいと思います。

シーン010：キス

「ズルイ」

優しいあなたはのキスが好き

私の傷を癒してくれる、優しいあなたのキスが好き

だけど……

優しい事が、一番残酷な時もある

そんなあなたの優しいキスは

時として ズルイ

「奪う」

彼女は俺の言葉をキスで塞ぐ

キスの全てが幸せとは限らないなんて

少し……悲しい

「100万回」

愛してる

100万回そんな言葉を言われるよりも、
たった一度のキスがいい
たった一度の……本気のキス

「桜」

彼女のキスは

ひらりひとひら桜の花と

ほんのりほのかな香りと共に

「フレンチ」

私の小さな恋人に、初めてキスをされた今日

フレンチキス記念日

「カクテル」

俺は彼女を待つ時間、ほんのり苦いカクテルを飲む

そんな俺の口直しは、ほんのり甘い彼女の唇

「クレイジー」

人は私を狂ってるって言うけれど、狂わない方がおかしいわ

何故って？ 当然でしょ

彼の唇は、私を野生に戻すもの

「女」

薄暗い場所で、キツイ香水を振り撒きながら男を誘惑する女も良いが

太陽と淡い花の香りをさせる女のキスも、俺には必要

「レモン」

ファーストキスはレモンの味って言うけれど

彼の唇は、優しい気持ちの味がした

「リンゴ」

俺の横で、静かな寝息を立ててる彼女にキス

姫を起こすのは、王子様のキスと決まっているから

シーン011：特別

「静寂が耳に痛い」

俺はふと……そう感じていた。

夜中の2時

昼間の喧噪が嘘の様に静まり、暗い部屋の中では全ての音が消えて無くなったかの様に感じられる時間。

俺はとうとう眠れずに、ベッドからフローリングの床へと身を投げ出した。床の冷たさが、火照った体に気持が良かった。

そんな、少し冷たい床に、そつと耳を付けてみる。

そこから聞こえてくるのは、妙にハッキリとした自らの心音と、呼吸の音だけだった。

「こんな事があるなんて」

俺はある事を思い出すと、自らの鼓動が乱れるのを感じた。

「全てが眠りについたらみたい」

私はふと、静寂の夜にそんな事を考えていた。

もちろん、全く物音がしない訳では無いけれど、今の私にはそんな風に感じられるほど、ある一つの事に気が取られていた。

「……」

私は読もうと思って手に取っていた小説に、栞を挟まないままベツドの脇にあるテーブルへと置いた。いつも、眠れない時には推理小説などを読むことにしているのだけれども、今日ばかりは内容が手に付かないままページが進まなかった。

理由は分かっている。

「物語でもあるまいし」

私は声に出してみたけれど、その事を否定することは出来なかった。

俺の住む街は、都心のベッドタウンとして開発され、ここ10年で人口が10倍以上に増えたという大きな街だった。

街は人口が増えていくに従って、ちょうど中心に位置する駅を囲むように開発されて行き、軒並み色々な店などが建ち並ぶ様になった。

もちろん、駅を利用する人も10年前とは比べものにならないくらいに増え、朝のラッシュ時は大変な状況になる。

その日の俺は、そんなラッシュの混雑を嫌い、いつもより30分も早い電車に乗るべく駅のホームへ立っていた。

朝の30分は、俺にとってはもの凄く貴重であって、普段なら、早起きすることなど思いもよらない時間だったのだが……

それでも俺は あの日、あの時、駅のホームに立っていたのだ……

私と家族が、都心への通勤や通学が便利と言うこの街へ引っ越してきたのは、ちょうど一年くらい前の事だった。

元々都内のマンションに暮らしていたのだけれど、妹が大きくなり、私自身も一人の部屋が欲しいと言う理由から、家賃の安いこちらの街へと移り住む事になった。

その為に、多少朝が早くなってしまったけれど、私自身は朝早くの新鮮な空気と言うものが好きで、早起きはさほど苦にならなかった。

その証拠に、学校へは十分余裕のある電車に乗って、遅刻とは無縁の生活をしている。

そしてあの日も、いつもと同じ気持ちの良い朝の空気を吸い込みながら、いつもと同じ時間の電車に乗るために、駅へと向かっていた。

別に理由があった訳ではなかった。

俺が通う高校は、都心とは反対側の電車で15分ほどの3つ先の駅で降りる。いつもなら、遅刻ぎりぎりの電車に飛び乗り、いつもの同じメンバーと顔を合わせ、いつもの様に馬鹿な話を繰り返した

がら通うはずだった。

だからその日、30分も早いその電車を待つことは、冗談ではなく、自分自身でも良く分からなかった。

そう、強いて理由を付けるなら、変わり映えのない日常から抜けだし、ちょっとした非日常の中に『何か』特別な変化を求めたのかも知れない。

その『何か』も、分からないままに

朝の電車と言うのは、同じ時間に同じ場所で、同じ顔ぶれが出逢う。

それは、いつもと変わらない出来事が、当然の様に過ぎていく場所なんだと私は思った。

案の定、駅に向かう途中には見慣れた顔の人が多かった。

私の家からは、6分も歩くと駅の階段が見えてくる。

そして……私はいつもと同じように、その階段を登り始める。

俺はいつもと違う顔ぶれに、少々興味を覚えていた。

それもそうだろう、普通、朝の電車では毎日のように同じ顔ぶれが揃うのに、今日に限っては、全く見たこともない人間ばかりなのだから物珍しい感覚なのは当然だった。

むろん、俺自身の方が珍しい存在であり、相手に不思議がられてはいるのだが。

と、その時、電車の到着をアナウンスする声が、上下同時に告げられた。

そうか　　登りと下りが一緒に入ってくるのか。

物珍しい風景を眺めながら、俺はアナウンスを聞いていた。

私が乗る電車は、上下の列車が同時にホームに止まるうちの一つだった。

私は自動改札を通ると、乗り換えに便利な後列の車両へと乗り込む為に、いつもと同じ階段を下り始めた。

案の定、ホームには一度も話をしたことの無い見知った人の顔が多く、いつもと同じ動作が繰り返されている。

大きなビジネスバッグを片手に、新聞を4つに折って読んでいる40代の男性。

ハンドバッグの中から小さな鏡をとりだし、前髪の流れ具合を確かめている20代のOL。

もう少し経つと、駅の階段を駆け下りる様に走ってくる制服姿の男の子。

日常の風景は、今日も変わらずに過ぎ去ろうとしている。

そしていつもの様に、電車の到着を告げるアナウンスが、上下同

時にホームに流れてきた。

その列車は、アナウンスから少しして、いつもと同じように上下ともほぼ同時にホームへと滑り込んできた。

その時俺は
その時私は

非日常の中で
日常の中で

彼女に
彼に

出逢った。

そう、交差する電車と電車の為に途切れ途切れに見える向こう側に、日常と非日常のなかの『特別』に出逢ったのだ。

俺はその時、一瞬で恋に落ちた。

そう、ちょっとした日常から抜け出したあの日、俺は『特別』なものに出逢い、それを手に触れてみたい、いや、それを手に入れたくてしょうがない気持ちでいっぱいになった。

彼女の事を知りたい。彼女と話したい。彼女の名前は？彼女の年は？彼女はどこの学校に行っているのか？彼女は何に興味があるのか？彼女はどんな風に笑うのか？彼女は

俺は彼女への思いによって、眠れぬ夜を過ごす事になる。

私はその時、一瞬で恋に落ちた。

いつもと変わらない日常のなかで、私は『特別』なものに出逢い、それを手に触れて見たいと思った。いや、そんな生やさしい気持ちではなくて、もっと激しく手に入れたと思うようになっていた。

彼の事を知りたい。彼と話したい。彼の名前は？彼の年齢は？どこの学校へ通っているの？彼が興味のあるものは？彼はどんな風に笑うのだろうか？彼は

私は彼への思いを静める事が出来ず、眠れぬ夜を過ごす。

俺は時計を見ると、急いで家を出た。

昨日と同じ時間。

今日だけは絶対に遅刻する事が許されなかった。

なぜなら俺は、昨日と同じ電車をあの場所で待たなくてはならなかったから。

そう、『特別』なものの為に

私は時計を見ると、いつものように家を出た。

いつもと同じ時間。

だけれども、今日だけは絶対に遅刻する事は許されなかった。

なぜなら私は、いつもと同じ電車をいつもと同じ場所で待たなくてはならなかったから。

そう、『特別』なものの為に

駅ではその時間、いつもの様に上下の電車が同時にホームに入ってくる。

いつもと同じ日常や、ちょっとした非日常に向かう人々を乗せ、静かにホームを後にする。

ひとときの静寂が訪れる。

しかしその日、その時間のいつものホームには 見つめ合う
一組の男女が残っていた。

そう、特別な……人の為に

シーン012：視線

「いい男になりたかったらね、余計な事は聞いちゃいけないのよ」

そう言う彼女、人差し指で俺の鼻先を軽くはじいた。

「ちえ、直ぐそうやって子供扱いするんだからな、かなわないよ」

「君がもう少しいい男になったらね、大人として接してあげるから」

「それっていつ？」

「そう……ね、あと10年は先かな」

彼女はいたずらっぽく微笑んだ。

彼女の名前は高科瑞葉。

スツキリとした顔立ちで、知的な雰囲気を感じさせる美人顔の彼女だが、実は、笑うと右頬に針で突いた様なエクボが出来てかわいらしい。

彼女は某都内にある名門大学に通う大学生で、年は俺よりも3つ上の21才。どういう知り合いかと言えば簡単に、彼女は大学受験を控えた俺の家庭教師だった。

およそ、家庭教師とは思えない、そう、はたから見れば出来の悪い弟に勉強を教えている姉と言った様に性格が明るく、いつも笑顔をたたえていた。そんな彼女は、有名大学の名に恥じない優秀な学力の持ち主であり、勉強の教え方も上手なハズ……だと思っただが、実は、彼女から勉強を教えてもらうと言う事があまりなかった。

と言うのも、彼女の家庭教師ぶりはこうである。

まず問題を渡されて、次回までにその問題を解くことを命じられるのだが、彼女はその問題に対して何も教えてくれないのだ。

つまりは自分で参考書などで調べ、そして全部回答欄を埋めなくてはならない。

そして次の時に問題の採点をするのだが、この時、タダの採点では終わらない。問題に対して、どの様にアプローチして、どの様に解答を導き出したのか、その全てを彼女に対して説明しなくてはならないのだ。

つまり、与えられた問題を自分で解き、彼女にその解き方を説明するのである。

「なんだよそれ？それじゃ家庭教師の意味が無いじゃん」

俺は最初、この形式にする意味が全然分からなかった。

それもそうだ、なんでお金を払って来てもらっている家庭教師に、逆に、問題の解き方を教えなくてはならないのか？普通の人間ならば、誰もがそう思うハズだ。

しかも彼女は、俺の家庭教師の時間には適当な雑誌を買って読んでいたり、時には俺とくだらない話ばかりしていて、本当に何もしない事の方が多いのだ。

だから俺も

「これじゃ教えてもらってる意味無いじゃん」

と、正直に言った事がある。

すると彼女はこういった。

「いい？問題って言うのはね、自分で調べて、自分で解答を見つけるから勉強になるの。それに、人に問題の解き方を説明すると言う

のは、その問題の解き方を本当に理解しているのかを見るのに一番いい方法なのよ。あやふやな理解の仕方では人に説明出来ないですよ。

これは学校の勉強ばかりでは無く、社会に出てからも絶対に必要な考え方だと思うわ。だって、人に頼ってばかりだと自分の問題に対して責任を持てなくなるでしょ？自分の問題くらい責任を持つて、そして、自分で解決しなくてはね。

それに、自分の問題に責任を持って解決する、もしくは解決出来るのは……」

「いい男の条件なんでしょ？」

「そ、解って来たじゃない」

「うーん、なんか騙されている気がするけど……」

何となく納得できる様な、しかし、上手く丸め込まれていると言う様な、この時の俺はまだ半信半疑でしかなかった。

しかし、ここ最近の学力テストではなかなか成績も好調であったし、確かに勉強していて良く分かる様になっていたので、やっぱ、自分で解決する力がついたのかな……と、思えるようになっていた。

そうそう、それから

「いい男」

これは彼女の口癖で、何かと彼女から「いい男の条件」講義を聴かされるのだ。

そんな訳で、一番最初の会話も家庭教師の時間に言われた言葉だった……

男なら、一度は年上の女性に憧れる時期と言うものがあるのかも知れない。

学校で男同士が集まると、どうしてもこう言った話題があがるも

のだが、今回は彼女にするならどの年齢が良いか？と言う話になった。

「俺はやっぱり同年代か年下が良いな」

「あ、俺も俺も。やっぱり同年代とか年下の方が気楽につきあえるじゃん」

「まあ、年上の女性となると、あんまり接点も無いしな」

と、大体はこんな感じで、同年代か年下とつき合いたいと言う奴が多かった。

しかし、そんななかでも、ツウを自認している男が、「ツウなら年上だな」などと、訳の分からない事を言いだす。

「なんだよ、そのツウなら年上って言うのは」

「だからさ、年上の女性なら、色々と教えてもらえるじゃねえの」

「色々ってなんだよ」

「だから色々だよ。遊びとかセックスとかさ」

ツウを自認する男は、事も無げに言い放った。

「おお、それは良いな。一度くらい遊ばれて見たいよ」

「何言ってるんだよ。お前なんか相手にしてくれる分けないだろ」

「わかんないぞ、案外俺みたいな男が母性本能をくすぐって『ふふっ可愛がって、あ・げ・る』なんて言われるかも知れん！」

と、そのツウの男が言う

あははははっ！！

「無理無理、絶対に有りえん！」

これを聞いていた人間が、一斉に笑い出していた。

俺はそんな話に気軽に笑える奴らが、とてもうらやましかった。年上の人を好きになってしまった時、現実はそのようなものじゃ無いことを知っていたから。

俺が男で、彼女が女。

こんな事を考える事自体、俺の考えが幼いのかもれない。もつと男としてしっかりとした生き方をしていれば、こんなくだらない思いに悩むような事は無いのかも知れない。

そう、人を好きになるのにそれがどんな関係であろうとも構わないハズだから。

だけれども、高校3年の俺にとって「男が女性よりもしつかりしていなくてはならない」と言う思いが消えて無くなる訳ではなく、逆に、たった3年と言う年齢の差が、とてつもなく大きく思えた。

「先生さ、今度どっか遊びに行こうよ」

俺は家庭教師の時間に、いつものようにベッドでファッションだかの雑誌を開いている彼女を誘ってみた。

「んー。なんで？」

「なんでって、理由は無いけどさ……」

俺は自分の本当の気持ちを隠していた。

彼女を遊びに誘うと言うのは、彼女と勉強以外で一緒にいたいと言う気持ちがあったからだし、それに、彼女につき合っている男がいるのかどうかを知りたかったからだ。

幸いにして、彼女はそんな俺の考えに気付かない様子で

「じゃ、映画でも観に行く？」

と、雑誌を読み続けながら返事をしてきた。

「映画？」

「これなんかどう？」

そう言って彼女は、読んでいた雑誌を俺に向けて見せた。

映画の特集記事だった。

「なんだかつき合わせちゃったみたいで悪いわね」

ここは映画館を出てから割合と近い喫茶店。映画を見終わった彼女が、何か軽く食べようかと提案してきたので入る事になったのだ。「別に、それ程悪い映画でもなかったし」

（俺はどんな映画でも良かったよ）

「そう？でも普段はあんな恋愛ものの映画なんて観ないでしょう？」

「そうだね、でもその分新鮮だった」

（先生と一緒になら、何でも良かったんだ）

「新鮮か……」

彼女はそう言つと、珈琲に口を付けてから外の風景を眺めた。

どうしてそんな横顔をするんですか？

彼女の視線の先には、外の車や高層ビルなどの風景は映っていないかっただろう。

映画を観ている時も、話しながら道を歩いている時も、珈琲を飲んでいる時も、時々見せるその横顔、そして視線。言葉には出ていなくとも、解ってしまう瞬間。

いい男になりたかったらね、余計な事は聞いちゃいけないのよ

俺は初めてこの言葉の意味を知った気がした。

「いるよ、私には」

彼女の横顔が、視線が、語っているのだ。

「いるんだよ、好きな人が、愛している人が……」と。

「先生」

「ん？」

「俺、自分の恋の責任くらい、自分で取りますよ」

「……そう」

「瑞葉さん、俺は　それでもあなたを愛しています」

シーン013：子猫

あいつはまるで猫の様だ 俺は不思議とそう思う事に抵抗が無かった。

あいつって言うのは幼馴染みである北崎凜きたさきりんのこと。

凜は、肩口まで伸ばしているサラサラの黒髪に驚くほど艶があつて、いつもいい匂いをさせてたりとか、スツキリした顔立ちに大きくて良く動く瞳がとても印象的だとか、とにかく、ひげやしっぽこそ生えてなかったけれど、まるで子猫を思わせるかの様に可愛いかった。

さらに、凜が笑うとほら 両方の頬に針で突いた様なエクボが出来ると言うおまけつき。

案の定、クラスの大概の男は凜の事がお気に入りだったし、俺から見ても、エクボを見せる凜は本当に可愛いと思えた。

だけど、だからこそ、あいつの事を猫の様だと思う。

凜とは家が隣同士で、本当に小さい頃から一緒に育ってきた。

何せ両方の母親が大学の時の同期生だったらしく、家族ぐるみで仲が良くなるのも当然と言う状況。しかも……両方の母親がほぼ同時期に妊娠して、いざ凜の母親の陣痛が始まったと思ったら、うちのかーちゃんも産気づいて、同じ日に同じ病院で二人とも生まれてしまったのだ。

いくら仲が良いと言っても、ここまで一緒にすることはないと思っただけど、とにかく、俺と凜は本当に生まれた時から兄弟の様に育

ってきたのだ。

だから俺は エクボを見せる凜の、もう一つの顔も知ってる。
凜は性格も猫の様なんだってこと。

基本的に凜は素直だ。クラスの中でも性格の良さでは有名だったし、何しろあの顔だから嫌われる事はまず無かった。けれど、俺と二人きりの時の凜は、本物の猫の様にわがままで気まぐれで、機嫌が悪くなると思ったら、プイッとそっぽをむく事も珍しくない。

常に兄妹の様に育ったからか、凜は俺と二人の時は頼りたがる傾向にある。

しかも困った事に、無理なお願いする事が多い。

ついこの間も春の海が見たいと言い出して、俺は自転車の後ろに凜を乗せ12kmもの道のりを走らなければならなかった。

だから俺は、毎回の様に苦勞させられる凜のお願いを今度こそは断ろうと思うのだが……凜のあの笑顔でお願いされると、断れなかった。ちくしょう

とにかくあいつは、猫の様だ！

「な、おちゃん」

ホームルームで先生のくだらないギャグを聞き流し、やっと終わった と思った時、斜め後ろの席にいた凜が俺のことを呼んだ。

嫌な予感がした。

過去の記憶から、凜が俺の名前をこんな風に伸ばしながらちゃん付けで呼ぶとき、絶対に何かお願いごとがあると云う事を知っていたからだ。

「何だよ凜」

「あのね」

「待てよ、この前の時もそんな顔して頼み事してたよ……」

「まだ何も言っていないよ」

「大体の想像がつくんだよ。どうせ頼み事だろ」

「そんなの判らないじゃない」

「でも頼み事なんだろ」

「うん」

「……………」

俺はこういう時ほど、凜の根性の良さを感じる事はない。

凜は人に頼み事をするとき、大概のヤツが頼み事を聞いてくれる事を本能で知っているのか、少し上目遣いでじつと人の顔を見つめながら話してくる。

そんな時の凜の瞳は、強力な武器だ。

時々俺は、凜が自分の武器の事を良く理解していて、それを最大限に利用しているものだと思えるのだが 実は天然の性格だと言う事も知っている。

実にズルイ。

「それで、今度はなんだよ」

「なおちゃん、お願い聞いてくれるの？」

「分かんない。無理なお願いだったら出来ないよ……けど、話しだけは聞いてやる」

「ありがとうなおちゃん！ それでね、あのね」

俺の通ってる小学校は、てっぺんまで100メートルも無いような山だけど、校舎はちょうど山の中腹にあって、下から見ると林の中に埋まつてる様な格好だった。

だから体育館の裏手には林が広がっていて、それでもって先生達

もあんまりやってこないから、俺達生徒の秘密の場所見たいになっているのだ。

凜はそんな体育館の裏に俺を連れてくると、少し影になっているところから段ボールの箱を取りだしてきた。

「あのねなおちゃん、この子うちで飼いたいんだけど」

そう言うと、一匹の三毛の子猫が俺を屈託のない瞳で眺めてくる。「それは無理なんじゃないの？」

凜の両親は決して動物が嫌いと言う訳ではない。逆に今も動物を飼っている程だから、何も問題が無ければ大丈夫だったかも知れない。

ただ、今飼っている動物が『鳥』と言う事を除けばの話しだけだ。

「だって凜の家じゃ鳥飼ってるじゃん」

「でも、この子何とかしないと死んじゃうよ。なおちゃんはそれでも良いの？」

…… まったく、凜は絶対に知能犯だ。

そんな顔してこっちの事見つめて来るなって言つの！

「だからって……何も凜が飼うこと無いじゃん。誰か飼ってくれる人を捜した方が良くないじゃないの？」

「でもさ、見てよ、この子凄く可愛いんだよ」

そう言うと凜は、子猫を抱きかかえてあごの下を撫でだした。

なあ〜」

その子猫は凜に撫でられると、気持ちよさそうに目を細めながら喜ぶ。

確かにその猫は、猫ながらに顔がスツキリしていて目がまん丸。目鼻立ちがハッキリしているとでも言うのか、なかなかの顔立ちだ。スラリと伸びたしっぽが、今は凜にあごを撫でられているからか、気持ちよさそうに揺れている。その姿は 誰かに似ていた。

「でもさ、鳥はどうするんだよ。凜だってお気に入りにゃん」

「うん……でね、お願いがあるんだけど」

「うわっ！ これはヤバイ 凜のこの顔。」

「ダメ」

「まだ何も言っていないよ」

「だからってダメ」

「ね、聞いてってば」

「だってどうしようも無いじゃないか」

「お願い」

「言うなって」

「お願いだからなおちゃん、この子の事、お家で飼ってくれない？」
あゝあ、とうとう言っちゃったよ。

最初から嫌な予感がしてたんだよ、こんな風に子猫を段ボールに入れて牛乳やらパンやら上げてて、それを俺に見せるって事が。

「だって凜、うちだって猫なんか飼えるかどうか判らないんだぞ」

「ね、だからなおちゃんのお母さんに、お家で猫を飼える様にお願
いして欲しいの」

「猫の世話はどうすんだよ、凜が面倒見る訳じゃないんだぞ」

「だって……」

うつ 凜のヤツ本当にがっかりしてる見たいだ。

でもなあゝ、俺も猫は嫌いじゃないけど、飼うとなると別問題だし……第一うちのかーちゃんが許してくれるかどうか分かんないし。

「ね、なおちゃんお願い。この子の面倒、私も見るから」

まったく、そんな顔で頼まれたら嫌って言えねえじゃんか！
俺は少し甘やかせすぎかと思っただけど、これから、凧の「な
おちゃん」と言う台詞を聞いて、そのお願いごとを叶えていくんだ
と判っていた。

だってあいつは　可愛い子猫ちゃんだから、ね。

ちよこつとONE　SCENE！

直哉・凧14才、中学3年の卒業前の春

「あのね直ちゃん……相談があるんだけど」

凧はいつもの様な無邪気な態度を見せず、少し緊張した面もちだ
った。

その理由は分かり切ってる、俺と凧は卒業を2週間後に控え、お
互いに微妙な感情の変化を感じとって、ここ最近、少しぎくしゃく
した会話が続いていたからだった。

中学3年の卒業間近と言うこの時期は、一種、告白の季節だった。
高校生になると別々になってしまうので、その前に自分の気持ち
を伝えたいと思う者とか、卒業を前に、自らの気持ちに区切りを付
けたいと思う者とか、この時期、告白ウイルスをまき散らしてい
るからだ。

俺と凧との間が最近ぎくしゃくしている理由はつまり、告白ウイ
ルスの影響が大きいのである。

だけど、好きとか嫌いとか、俺は今までそんな目で凜の事を見たことが無かった。

一緒の日に生まれ、まるで本当の兄妹の様に育ってきただけに、そんな感情を持つことが無いままここまで来てしまったのだ。

もちろん、凜の事を可愛いとは思っただが、それでもやっぱり恋愛感情などを持ったことは無かった。

だから、こんな状況になったのはこれが初めてだし、そしてどうして良いのかも全く判らないまま、ぎくしゃくとした雰囲気を引きずっているのだ。

「相談って、なんだよ」

「うん、あのね、これもちゃったんだけど」

凜は、鞆の中から一枚の手紙を取り出した。
中身を見なくても一瞬にして判る。

ラブレターだ。

「これって、で、俺にどうしろって言うんだよ」

「これ、どうしたらいいかと思って」

俺は何故だか無性に腹が立って、凜の事を怒鳴っていた。

「これは凜がもらったんだろ、だったら俺に相談なんかするなよ。」

これを出したヤツはきつと真剣になって書いたんだぜ、それを人に見せる様な事をするなよ」

「あ、あの」

「凜が決める事だろ、それを俺に言うなよ」

「ご、ごめんなさい」

そう言つと凜は、うつむきながら俺の前から掛けだした。

ちくしょう！

俺は、なんだか自分が悪いことをしたように心が痛んだ。

判っていたじゃないか、凜が俺に止めて欲しいと思ってるって事ぐらい……

俺は怖かったんだ、凜の気持ちが自分に向いているのかいないのか。それがハッキリしたときに、自分が傷つくのを恐れてた。だから凜に対してあんな風に怒ってしまったんだ。

ちくしょう！

でも、それ以上に解ってたじゃないか、凜がわがまを言うのは俺にだけだって……そして、凜が俺の事を好きだって事も、俺が凜の事を好きだって事も。

ちくしょう！

三度目のちくしょうの前に、俺は走り出していた。

「やっぱりここか」

俺は母校である小学校の、体育館の裏でうつむきながら肩を落としている凜を見つけた。凜が、嫌なことや落ち込むことがあると、いつもこの場所に来ている事を知っていたからだ。

「直ちゃん」

顔を上げる凜の瞳がぬれているのを見ると　ズキズキと心が痛む。

「凜……」

俺はそんな凜を見て、ふと昔の出来事が思い出されてきた。

「そう言えばここで、猫を飼ってくれてお願いされたっけな」

なんでそんな事を思い出し、そしてこんな言葉を言ったのか解らなかった。本当は、凜に俺の素直な気持ちを伝えようと思ってここに来たのに、いざとなったらふっとんじまった。

「猫」

「そうだよ。結局俺の親父の会社の人が飼ってくれた、あの猫だよ」「懐かしいね」

凜はそつと涙を拭くと、笑顔を作ろうと努力している様だった。

「なあ凜」

「ん？」

「あの時の猫はさ、俺が面倒見てやれなかったけど」

「うん」

「お前の面倒は俺が絶対にみてやるよ。だから、わがママを言うのは俺だけにしろ」

言っちまった!!

スゲー恥ずかしいぞ。

しかも好きとかって言葉じゃ無くてこんな言葉なんて。

「直ちゃん」

「お、おう」

「直ちゃん!」

「おうっ!」

「大好き」

「おうっ! 俺も凜の事……好きだ」

俺はこの日、告白ウイルスに感染した。

シーン014：歩幅

「おめでとう」

そう言って彼は、プレゼントと共に私の誕生日を祝福してくれた。

四月八日、この日は私の誕生日であると同時に、彼と出逢った想い出の日でもあった。

記憶の箱を紐解くと、それは　　舞い散る桜の花びらと共に甦って来た……

「覚えてる？」

私の不意の質問に彼は、何が？　と、問い返してきた。

「私達が一番最初に出逢ったときのこと」

「ああ覚えてるよ。8年前の今日、俺たちが高校一年の時だろ」
彼は懐かしそうな顔になった。

「あの時もちょうど、桜の花が満開の時だったのよね……」

私達二人は、8年前の想い出に心を馳せていた。

私の住む街の桜は、入学式に合わせる様にして満開を迎えるのだが、それはあたかも、新しい場所へ旅立つ者を祝福するかのように咲き誇る。

そして、私が通うことになった高校でも、正門から続く30メートル程の道の両脇に桜が植樹されていて、入学式には満開の桜の花

のアーチをくぐることになった。

純白の、雪のような白さの中に、ほんのりとした紅を湛える桜の花びらが風に揺られ、ゆらりゆるりと舞い散る様は　人を優しい気持ちにさせてくれる。

しかし私は、その桜の姿にどこか　寂しさを感じずにはおれなかった。

そう、あの時の私は膝を悪くして、大好きだったバスケットを断念しなくてはならず、新しい生活への期待とは裏腹に、いや、期待が大きければ大きい程、寂しさを感じずにはおれなかったのである。

彼とはそんな、桜の花びらが舞う校舎の中で出逢ったのだ。

「懐かしいな」

彼はあの時の事を思い出して、そう言った。

そう、確かに懐かしい。8年も前の事だ、記憶はセピア色に染まり、懐かしいと思うには十分な時間だった。

「あの時俺たちは、同じクラスになったんだよな」

そう、彼と初めてであったのはクラスが一緒になったからだった。今はもう、何を言ったのか思い出せなかったが、自己紹介の時の、彼の恥ずかしそうな顔は微かに覚えていた。

「でも、初めて話しをしたのは、あれから3日後だったのよね。その事も覚えてる？」

「もちろん覚えてるよ。確かあれは、クラブの見学が始まった日、体育館へ向かう途中だった」

そう、校舎から体育館へと向かう長い渡り廊下で、私の方から彼に声を掛けたのである。

入学式から3日も経つと、自己紹介やオリエンテーションなども終わり、授業の方もちらほらと始まりつつあった。それにクラブの見学も今日から出来る様になるそうで、気の早い者の中には、直ぐにでも参加できる様に用意をしている者もいた。

私はそんな様子を眺めながら、益々寂しさがこみ上げて来るのが分かった。

あれ程好きだったバスケットを、怪我のためとは言え諦めなくてはならなかった挫折感。人がなんの不安も無しに好きなことを続けられる事への嫉妬。

それらの感情の先に、寂しさがあった。

医者からは、リハビリを続ければ普通の運動をするには全く問題ない程度に回復すると言われていた。しかし同時に、それが長く掛かるとも。

つまりそれは、私が高校生の間に再びコートの上に立つことが出来ない言う事だった。

だから私は、いつそのこと、全くバスケットから遠ざかってしまおうかとも思った。友達がコートの中でプレイする姿を見続ける事は、正直辛いモノがあったからだ。

しかし、それ以上にバスケットから遠ざかってしまう事が出来なかった。

バスケットが好きで好きで、どうしようもなかったからだ。

そして私は、男子バスケット部のマネージャーになることに決めた。

女子バスケ部のマネージャーも考えたのだが、やはり、同じ女の子がコートの上でプレイしている姿を見続けるのが辛かった。けれども何らかの形でバスケットと関わりたいとも思っていた。

男子バスケット部のマネージャーという位置は、そんな二つの問題の、ギリギリの選択だったのである。

放課後になってそれぞれが見学へと出掛ける中、私は少し遅れて男子バスケット部が練習をしているだろう体育館へ向かって歩き出す事にした。

校舎と体育館は結構離れていて、少々長めの渡り廊下を歩く事になるのだが、春先にしては少し寒さの残るなか、私は膝に違和感を感じながら歩いたのを覚えている。

その時だった。私は、バスケットシューズを手に持ちながら私の横を追い越して行こうとする彼のことを、呼び止めたのである。

「懐かしい」

今度は私が声に出して言うと、彼もそうだな　と、頷いた。

あの時どうして呼び止めたのかと言えば、彼がバスケットシューズを手にもっていた事があるだろう。あの後一緒に、体育館へと向かった記憶がある。

「そうだな、俺が瑞葉と一緒にクラブの見学に行ったら、彼女同伴だ！って、凄くからかわれたのを覚えてる。もちろん、瑞葉がマネ

「ジャーになってからも、さんざ嫌味を言われたっけ……」

そうだ、そう言えばそんな事もあった。

あの後一緒に体育館へと向かったのは良いのだが、周りにいた先輩達が私達の事を恋人同士だと勘違いして、冷やかされたのだ。

もっとも、私達はそれからまもなくして付き合う事になったので、あながち嘘とも言えなかったのだが……

あの頃を思い出すと、話題が次から次へと出てきて尽きそうにもなかった。そして出てくる話題の全てが懐かしく、そして忘れられない大切なモノであったから。

結局、ラストオーダーのお酒を飲み終わるまで話しを続ける事になったのだが、とうとう閉店という事になり、私達は思い出話に別れを告げて帰路につくことにした。

支払いを済ませてお店を出ると、街の所々では桜が満開を迎えていて、ゆらりゆらりと、花びらが風に揺られて宙を舞っている。彼は、あの頃と変わらずに、私と並んでゆつくりと……歩いてくれている。

そんな時、私はふと 彼から貰った一番最初のプレゼントの事を思い出した。

「俺があげた一番最初のプレゼント？ 高2の時のオルゴールだったかな……」

私が彼に覚えているかと聞くと、彼は、私が今も大切にしているオルゴールの事を言った。

しかしそれではない。私ができる事を言うと、彼はしばらくの間考
え込んでしまった。

「ヒントはね、私達が一緒に体育館へ向かった時の事よ」

「え？あの時にプレゼントなんかしたかなあ……」

私がヒントを出してみるが、やはり、彼は全く思いつかない。

もともと、私が貰ったプレゼントとは形に残るモノでもなければ、
プレゼントとは少し意味合いが違っていたので、彼が思い出せなく
ても仕方のないことなのである。

「歩幅よ」

私がそう言うと、彼は意味が分からず聞き返してきた。

「歩幅？」

そう、彼からもらった初めてのプレゼントは、「歩幅を合わせて
くれる」というさりげない優しさだった。体育館へ向かう時、無意
識に膝を庇いながら歩いていた私に、彼は歩幅を合わせてくれたの
だ。

でも そんな事当たり前だろ。

私ができる事を言うと、彼は照れくさそうに笑う。

そうかも知れない。多分普通の人の感覚なら当たり前なのなの
かも知れない。

しかし、当たり前前のことを当たり前前のこととして行えない人が多
い中、そして、桜の散りゆく姿に寂しさを感じていた私に取っては、
かけがえのないプレゼントとなったのだ。

相手の歩幅に合わせて歩く このなんでもない行為に、私は彼

の持つ優しさを十分受け取っていたのだ。

そして今も、彼は私に歩幅を合わせて歩いてくれている……あの頃の様に。

シーン015：刻む心

ヴァイオリンは本当の恋を知らなければすすり泣かない　胸を
焦がするような本当の恋を知らなければ歌わない

音楽の世界では良く言われる事だった……けれども、私にはそれが本当の事なのかどうなのか、判らなかった　そう、半年前の私には……

「ストップ！……今の所が半音ずれてるし、テンポも少しずれていく」

私は音楽学校へ通っていたのだが、それとは別に二人の先生に付いて練習をしていた。音楽の世界で、それもソリストとしてやっていこうと思ったら、毎日何時間もの練習と、楽界で少なからず力のある師の元で学ぶのが最低条件だったからだ。

それから、とにかく良い楽器を持つのも重要だった。

ヴァイオリンの名器と言えばストラディバリウスが有名だけれども、億の値段が付くそれは、ソリストの誰もが憧れる名器中の名器である。しかし、ストラディバリウスほどになると、お金があつたとしても手に入れるのは難しい　と言うよりも、ほとんど不可能に近い。オーナーが手放さないのだ。

ストラディバリウスの魅力と言ったら、その艶やかな音にある。10の普通のヴァイオリンの中から、一つのストラディバリウスの音が聞き分けられる程、素晴らしい響きを持っているのだ。オーナ

ーが手放す訳が無い。

値段がそのまま音に反映する訳ではないけれども、良い楽器を持つことは何もスタイルの問題ばかりではなくて、いい音を追求すれば、結果、高い楽器になると言う訳だった。

その点から言えば、私は恵まれていた。少なからず裕福な家庭に生まれ、三千万円という学生が持つには少々高すぎる物を持つ事が出来た。それに、弓を合わせれば三千八百万になる。

ソリストとして世の中に出なければ、申し訳が立たない金額だった。だから私は、同じ年代の女の子達が楽しそうに遊んでいる中、練習に次ぐ練習に明け暮れなくてはならない気がしていたのである。

「瑞葉君、今のところをもう一度」

その先生は36才という若手ながら楽界ではかなり力のある人で、指導を受けられるだけでも幸運だと言われていたが、私は彼の事が好きになれなかった。何故なら、楽譜を忠実に再現することに主眼を置いて、曲への解釈と言った部分をあまり重要視しなかったからそう、その先生の解釈を押しつけるだけの指導だったのだ。

どうして作曲家はこの曲を作ったのか？作曲家の置かれていた状況は？曲の背景は？

そう言う部分を排除して、なるべくミスの無い「良い子」を演じさせる。私自身の解釈など全く挟ませない師のやり方に、息が詰まりそうでいつも逃げ出したい衝動にかられる

そんな私の息抜きと言えば、もう一人の師に、私の音を聞いて貰っている時だけだった……

「瑞葉君……君はまだ、本当の恋をしたことが無いね？」

既に68才を越えて白髪だけになった先生は、私が難しい曲を難

なく演奏し終わると、しばらくしてから口を開いた。

「ヴァイオリンはね、本当の恋を知らなければすすり泣かないし歌わないよ」

私の事を本当の娘の様に接してくれる先生の瞳は、いつものように優しい。

「それは……どういう事ですか？」

「君は、難しい曲でもそのほとんどを難なく演奏することが出来るだろう。それはそれで素晴らしい。だけど、曲というのは感情豊かな人間が作り、そして、聞くのもまたその人間なのだよ……」

先生はそう言うのと、コーヒーを作ってくるよ　と言って、キッチンへ行ってしまった……多分、これ以上の答えは自分で出しなさいという事なのだろう。

これまでも、肝心の部分は必ず私自身に考えさせて来た先生だけに、今回もそうに違い無い……私はそんな先生の意図を読みとり、自分で答えを見つけようと思った。

ヴァイオリンがすすり泣く　とは、良く聞く話だけでも、私にはその意味する事が判らない……世界で活躍するソリスト達のヴァイオリンは、すすり泣いているのだろうか？

彼等の演奏を聴くと、確かに他の奏者とは違うモノがある。

まあ、楽器の違いという部分も多少ならずともあるのだろうけど、私にとってはそれは当てはまらない。何しろ三千万と言えば、ヴァイオリンでも良い部類に入るし、実際、いい音を出していると自分でも思う。

では、解釈の違い……なのだろうか？

世界的に有名だった指揮者ヘルベルト・フォン・カラヤンは、オペラの指揮を代理で勤めたのがきっかけで、一夜にして名前が知れ

渡ったのは有名だが、彼の指揮は曲への解釈がとても深く聴衆の支持を受けていた。

もしそうだとしたら、私は曲への解釈が足りない事になる……先生はその事を言われているのだろうか？もしそうならば、もう一人の師に習っている事は無駄なのだろうか……

解らない。

自分でも演奏の技術に関しては自信があっただけに、音が出ていない、出せていないと言われ、否定したい気持ちもどこかにあった。

私は先生の言葉が頭の中をグルグルと回り始め、少し混乱してしまった。

ふう　こんな時、私にはいつもヴァイオリンで何気なく弾く曲があった。

ラ～ララララ～

ヴァイオリンの音と共に、メロディーラインを口ずさんでみる。
ラララ～ラ～

元々はピアノの、それも短い練習用の曲だったのだけれども、少し手直ししてヴァイオリンで弾く。本当に短くて簡単な曲だったけど、不思議とこの曲を弾いていると落ち着いてくるのが分かる。

そうだ、確かこの曲だったっけ……私が一番最初に弾いたのは……

私が短い曲を弾き終わると、いつの間にかコーヒーを両手にした先生がこちらを見ていた。

「今の音……ヴァイオリンが歌っていたね」

先生は、深い皺をその頬に刻みながら、微笑んでくれた。

「いやだ、先生聞いてらしたんですか？」

「途中からね……でも瑞葉君、さっきの曲は本当に良かったよ。ヴァイオリンが君と一緒に歌っていただろう」

「一緒に歌う……ですか？」

「そう、君と一緒にね、楽しげに歌っていたんだよ」

「私には……解りません。あの曲はリラックス出来る曲だったので、いつも何気なく弾いているんですけど、いい音を出そうと意識したことなんて無いんです」

「でも君は、あの曲でリラックス出来るのだろう？」

「はい……先生？一体ヴァイオリンがすすり泣くってどういう事なんでしょうか？私も世界で活躍するソリスト達の音は良く知っているつもりですけど、彼等の音と、私の音とはどこが違うんでしょうか……」

私は正直に質問をぶつけていた。

「瑞葉君、君の音は確かにいい音を出しているよ。それにヴァイオリンの技術という面では問題が無い……現に、難しい曲でも問題なくこなせているだろう？でもね、さっきも言ったとおり、曲を作ったのも聞くのも人間なんだ。演奏する曲の、もう一つの大切なモノを見つけてあげて、それを人に伝えてあげる事が大切なんだよ」

「……それは、曲への解釈と言う事ですか？」

「そうだね、曲への深い理解は一番最初の入り口だよ」

「入り口……と言う事は、出口もあるって言うことですよ」

「そう、出口を見つけてこそ、初めてヴァイオリンが歌うんだよ」
解釈が入り口で、そして出口を見つける　か。

「これは瑞葉君への宿題にしておこう。君もいずれはその出口を見つけれハズさ」

そう言う先生は、ミルクだけ入れたコーヒーに口を付けた。結局、答えは自分で見つけなければならぬ。

そして私は、先生からの宿題に頭を悩ませる事になったのである。

「恋をしろ……か……」

私はレッスンの後、帰りの電車の中で先生から言われた言葉を思い返していた。

「でも、私にはそんな時間は無かったわ……」

学校が終わっても次の先生の所へ追われるように出かけ、家に帰ってくるのは夜の七時を過ぎている。しかも、家に帰ったからとは言え、そこで練習が終わる訳ではなかった。

軽く夕食を食べたあと、留学の事を考えてドイツ語を勉強しなくてはならなかったし、寝る前にもう一度音を出してみる。それが週の内、6日も続くのだ。

残りの日はなるべく休むようにはしていたのだが、それでも丸々一日自由になるなどは無かった。

そんな状況だったので、どんな風に遊んで良いのかも解らなかったし、恋愛などしている暇が無かったのである。

恋……か……

私は声に出してみたけれど、実際、自分が本当に恋に落ちる事が出来るのか、そしてヴァイオリンがすり泣き、歌うようになるのか 解らなかった。

そう言えば、来週の日曜日はコンクールがあったっけ……

私は留学を前に、国内では一番格式のあるヴァイオリンのコンクールに出場することが決まっていたのだが、それが来週の日曜日にある。

その為最近では、ヴァイオリンの練習に当てるためにドイツ語の勉強を一時中断していたし、相当ハードな練習をこなすようになって

ていて、まさに一日中ヴァイオリンを弾いている感じだった。
益々、恋などとは無縁になっていたのである……

「ふう」

今日は少し、息抜きでもして行こうかしら　私のもう一つの息
抜きは、珈琲と共にクラシックのレコードを聴かせてくれる音楽
喫茶で『紅茶』を飲むことだった。

カランカラン

お店のドアを開けると、いつものカウベルの音と共に、髭を蓄えたマスターが「いらっしやい」と、小さな声で迎えてくれた。

お店では既にレコードが掛かっていて、珍しく、一人のお客さんが珈琲を飲んでいる。店内にはカウンター席とテーブルが五つほどあったが、私はマスターの目の前の席へと腰をおろすことにした。

「珍しいですね……お客さんが居るなんて」

私はそんな軽口をマスターに言ったのだが、マスターの方も心得ている。

「そうだね、瑞葉ちゃんに彼氏が出来るくらい、珍しいね」

と、やり返されてしまった。

マスターとはそれ程長い付き合いでも無かった　というのも出来たのが2年程前だから　けども、どこことなく話が合って、こういう言い合いが出来る仲だった。

「いつもので良いのかい？」

マスターは私が注文するよりも早く、この店では珍しい紅茶の葉っぱが入った缶を取りだして「本当は珈琲を楽しんで貰いたいんだけどね」と、笑っていた。

「ごめんなさいマスター、珈琲は先生の所でいただいてくるから……」

そう、別に珈琲が嫌いとか、この珈琲が特に不味いと言う訳では無かったけども、一日に何度も飲む程には好きじゃなかった。それに、珈琲の専門店で紅茶を頼むと言うのは珍しい事かも知れないが、マスターは何にでも凝ると言うのか、珈琲はもちろんサイフォンで淹れるし、珈琲の豆も、紅茶の葉っぱも自分で気に入ったものしか仕入れないのでもの凄く美味しかった。

だから私は、ココでは紅茶を頼むようにしていたのだが、マスターは何も言わない内に用意してくれるのである。

それからもう一つ、マスターが凝っているモノがあった。それは店内を見れば分かるのだが、大きなスピーカーから流れてくるクラシックの音楽だった。

マスターは昔からクラシックのファンらしく、店内には数多くのレコードが置かれていて、そのレコードの中にはコレクターが見たらびつくりするような貴重なモノもあるらしい。最近ではCDも集めているらしいけど、ここに来るお客さんにはいつもレコードを聞かせてくれて、リクエストにも応えてくれる。

今日店内にかかっているのは、珍しくクラリネット五重奏曲だった。

「これ、モーツァルトの五重奏曲ですよね……珍しいですね、マスターがクラリネットの曲を聴くなんて」

そう、マスターは幅広く聞く人だったけども、どちらかと言えばオーケストラを好んで聞いている、お客さんのリクエストが無ければだいたい大編成の曲が多かった。

「あのお客さんのリクエストですか？」

私はそつと、後ろのテーブル席に座っている青年の方へ視線を向けた。

「そつだよ、彼もたまにココに来てくれてね……瑞葉ちゃんと同じで紅茶ばかりのんで行くんだよ。今日は珍しく珈琲を飲んでいるけどね」

マスターはそう言つて意味ありげな表情になると、「気になるかい？」と言つて笑つた。

「そんなんじゃないません！」

もうマスターったら 私は軽くにらみ返してやつた。

と、ちょうどその時、曲がクラリネットの余韻を残しつつ終わりを告げる。

「どうだい？クラリネットも案外良いものだろう？」

「そうですね。でも、元々私はクラリネットって好きですよ。ヴァイオリンには無い柔らかな部分とか……今の五重奏曲だつて、たまに誘われて弾きますから」と、私は隣の席に置いたヴァイオリンのケースを軽く叩きながら答えた。

そう、ソリストとして練習しているものの、学校内ではたまに四重奏やオケなどの大編成にもかり出される事があつて、先程のモーツァルトの五重奏曲も第一ヴァイオリンとして参加したことがあり、その時、クラリネットの音の艶やかさに惹かれるものを感じていたのだ。

マスターはそんな私を見ると、いたずらを思いついた少年のように「そうなんだ、じゃ、今ココで少し弾いてみるかい？その青年と」と、言つて、テーブル席に座っている青年を呼んだ。

「おい朝倉君、ココの彼女がね君とモーツァルトと一緒にやりたいつて言ってるんだけど、どうだい？紅茶を一杯おごるからさ、ボクにも聞かせてほしいな……頼まれてくれるかな？」

どうやらマスターはその青年と知り合いらしい、気軽に声を掛けていた。

「ま、マスター」

私はそんなマスターを、恨めしそうに眺めていたが、その実、朝倉と呼ばれた青年に少なからず興味を覚えていた。どうやら彼がクラリネット五重奏曲をリクエストしたのは偶然では無いらしい。こちら側からは見えなかったが、立ち上がった彼の横にはクラリネットのケースが置いてあったのである。

そんな彼は、にこやかな表情でこちらに向かってきた。

「またマスターの悪い癖ですか？」

彼はマスターのこういついたずらを何度か経験して居るのだろう、苦笑している。けれどもその後で「ボクは彼女さえ良ければ構いませんよ」と、楽しそうな顔で答えていた。

「どうだい瑞穂ちゃんも？紅茶をおごるから一曲弾いてくれないかな」

マスターは普段、この手の頼み事は絶対にしない。場所柄音楽学校の生徒達が立ち寄る事が少なく無いのだけれども、だからこそ、息抜きの為に来ている人に無理をさせたくない　と言っていたのを思い出す。

たまに、話の流れから演奏する生徒がいるらしかったけど、それは自発的にする人が多いらしく、やはりマスターは無理強いをしたことは無いらしい。

そんなマスターが、今日に限っては珍しく頼み込んできた。

「あ、あの　私は別に構いませんけど」

私はそんなマスターを不思議に思ったが、別に嫌でも無かったし、逆にこんな場所で、しかも初めてあったこの青年と自分のヴァイオリンがどんな音を出すか試してみたかった。

マスターは私の答えを聞くと、本当に嬉しそうな顔になった。

「よかった。曲の方は二人に任せるよ……と、その前に、二人とも自己紹介したらどうだい？初めてだったよね、会うのは」

と言つて、私達の事を交互に見つめた。

すると朝倉と呼ばれた青年が、先に口を開いた。

「初めまして、朝倉涼って言います」

「は、はい、あの初めまして、高科瑞葉です」

私は朝倉涼という青年に握手を求められ、妙に緊張してしまった。

「涼君は27才だったっけ？」

「そうですね、まだまだマスターみたいに大台には乗ってません」

「おいおい、それは非道いなあ」。なに、涼君だって四捨五入すれば大台さ。結構早いぞ」

彼はマスターと余程親しい間柄なのか、軽い冗談を言つて笑いあつていた。

「そうそう、瑞葉ちゃんは21才になったんだっけ？」

「ええ、先々月で21になりました。直ぐその、音楽学校に通つてます」

よろしく　と、私が付け加えると、彼は「ああ」と言つた顔になつた。

「ああ、知ってるよ君のことは」

「え？あの、どうして……」

どこかで会つていたのだろうか？　私には覚えがなかった。

「いや、マスターに色々と聞かされてね、ヴァイオリンの名手だつて」

「そ、そんな名手つて言われる程でも……マスターが大げさなんです」

「いやいや、それは謙遜つて言うものさ。一度瑞葉ちゃんの演奏を聞かせて貰ったけど、その技術には光るモノがあつてね、ボクはファンとして応援してるんだよ」

「やだ……私つてそんなに凄い奏者じゃ無いですよ……」

私は否定したのだが、マスターは本当に凄いんだよ　と、譲らなかつた。

「なんだか恥ずかしいですよ、マスターからそんな事言われるの…

…」

誉められるのは確かに気持ちが良いけども、身近なマスターから言われると恥ずかしさが先に立ってしまう。

「でも、本当に凄いなだよ瑞葉ちゃん」

マスターはもう一度言っていると、彼は頭を掻きながらそれに答えた。

「そうか、マスターが認めてるって事は、ボクなんかお呼びじゃないかも知れないな」

「なに言ってるのさ、涼君だって腕前は人後に落ちないよ。ボクは涼君だって認めてるんだからね」

彼はそんなマスターの言葉に、手を振って恥ずかしそうに否定した。

「そんなお世辞を言っても、何も出ませんよ……」

「二人とも素直じゃ無いねえ……まあ、そう言う事でも良いけどさ、どうする？曲の方は」

マスターは私達に困ったような顔を向けた。ボクが認めてるんだよ　と、非難しているような顔だった。

「そうだなあ……高科さんは、何か弾きたい曲でもあるかい？」

「え？そうですね……私は大体は弾けると思うので、朝倉さんの好きな曲で良いですよ」

「うーん、ボクも何でも構わないんだけど、マスターは聞きたい曲とかありますか？」

彼が選択権を渡すと、マスターは少し考える素振りを見せた。

「そうだね……それじゃ、さっき掛かったモーツァルトなんかどうだい？アレは五重奏だから、第二ヴァイオリンとヴィオラ、それからチェロが無いけど、それくらいは即興で何とかなるでしょ。二人だったら」

マスターはそう言っていると、先程のレコードを取りだしてきた。

「うん、第2楽章・ラルゲット、二長調なんてどうかな？これだったら、クラリネットの柔らかくて甘美な音色も十分だし、第一ヴァ

イオリンとの対話風の掛け合いがあって良いと思うんだけど」

クラシック好きだけあって、マスターは二つの楽器を生かせる曲を選択してきた。

「良いですね」

「良いですよ」

自分でも良い選曲だと思ったのか、少しだけ得意げなマスターに私達二人の返事が重なった。

「今から良いコンビネーションだね」

マスターがからかうように笑ったのは言うまでもなかった。

素晴らしかったよ！！ マスターは私達の演奏が終わると、手放しで誉めてくれた。

「いや、お世辞じゃなくて本当に良かったんだよ」

マスターは少し興奮気味だった。

けれども、興奮していたのは私の方かもしれない。彼との演奏は、まるで長年一緒にやってきたかのように、もの凄くいい音が出せたから。

そう、何も打ち合わせをしない状況だったのにも係わらず、彼のクラリネットと私のヴァイオリンは絶妙と言って良い程にかみ合っていた。

それは、彼のクラリネット奏者としての実力が高かった事もある、けれど、それとは別に、彼のリズムに私が引き込まれ、私のリズムに彼が引き込まれ、お互いの良い部分が引き出されていくような気がしたからだった。

「凄い……」

私は自分のヴァイオリンから、こんな音が出るなんて思っても見なかった。

「楽しかった」

そしてそれ以上に、ヴァイオリンを弾いていて、こんなに楽しいと感じられた事が無かった。私は自分自身で信じられない程に興奮しているのを、抑えるのがやっとだった。

朝倉さんは一体どう思っているのだろうか？いいえ、彼にしても楽しさを感じているに違いないわ　私は核心に近いものを感じていた。

そんな事を思っていた私に、彼も顔を上気させながら「高科さんは本当にヴァイオリンが好きなんだね。一緒に演奏していて、その事が凄く分かったよ」と、言った。

「私が……ヴァイオリンが好き？」

私はそんな唐突も無い彼の言葉に、逆に聞き返してしまう。

「そうだよ、好きじゃなきゃ、あの音は出せないよ」

彼は問い返した私を不思議そうに見つめた。

それもそうだろう、私を感じたように、彼も先程の演奏で素晴らしい音の競演を感じたハズだ。それはヴァイオリンや音楽が好きな者で無ければ出せないモノのなのだから……

ヴァイオリンが好き？　私はしかし、その言葉の意味を考えていた。

私はヴァイオリンが好きなのだろうか？

確かに今、朝倉さんと一緒に演奏をした時はやっていて本当に楽しかった。きっとその事は本当の気持ちなんだろう……だけど、今まではどうだったのだろうか？

私は本当にヴァイオリンが好きで、厳しい練習に耐えてきたのだろうか……

本当は家族の為、期待してくれる先生の為、高価な楽器の為に続けてきたのでは無いだろうか……私には単純に音楽が好きだと言えない自分がいて、彼の言葉に戸惑いを感じてしまった。

「ボクも思うよ。瑞葉ちゃんは音楽が好きなんだよ」

「うん、絶対そうだよ。君自身、気が付いていなかったかも知れないが、音楽の楽しみに気がつき始めたんじゃないのかい？」

彼はもう一度、マスターに続いて言ってくれた。

そう……そうかも知れない。

私はヴァイオリンを弾くことが好きなのだ。老先生に私の音を聞いて貰っている時、私はあの時間が嫌いじゃない。それに今日、朝倉さんと一緒に演奏して音楽が……楽しかった。それは嘘なんかじゃ無いんだ……

「……私、音楽が好きなのかもしれない……」

声に出してみると少し恥ずかしかったけど、それは心地よかった

「瑞葉君、何か最近楽しい事でもあったのかい？」

いつものように珈琲をすすりながら、先生が聞いてきた。

「あら先生、どうして分かるんですか？」

そりゃ瑞葉君、君の音を聞いていれば誰でも分かるよ　と言いたげに、しかし先生は、声に出さずに深い愛情をたたえた微笑みを向けるだけだった。

「この前のレッスンの帰りに、ある喫茶店でクラリネット奏者の方と知り合ったんです。それで一緒にモーツァルトのクラリネット五重奏曲を……」

私が朝倉さんとの出来事を語っている間、先生はまるで自分の事のように嬉しそうな表情で聞いてくれていた。

「そうかそうか、その青年との演奏は楽しいんだろうね……」

私の話が終わると先生は、どこかいたずらっ子の様な、そう喫茶

店のマスターの様な表情で言った。

「え？私、朝倉さんの事青年って言いましたっけ？……どうして年の事が分かったんですか？」

確か一緒に演奏した事は言ったけども、朝倉さんの名前も性別も年齢の事も説明していないのに、先生が青年と言ったことが不思議に思った。

「まあまあ、それは良いとして、今日は少し早いけど、レッスンはこれで終わりにしても良いかな？」

先生は、不思議顔の私に向かって、はぐらかすような感じだった。けど今の私には、先生のこの申し出に疑問を持つことも、断るつもりも無かった。

「あ、あの……先生は何か用事でもあるんですか？」
それでも一応は、謙虚な姿勢を見せる。

「そうそう、私にはたった今、急な用事が出来てね……」

どうやら先生には分かってしまった様だ。はははっ と、笑いながら言われてしまった。

「もう、先生ったら！」

私はそう言いながら、老先生の事が益々好きになっていた。

カランカラン

いつものカウベルの音と共に私が入ると、「来たね」と言っ
て、マスターが笑顔で迎えてくれた……私が来るのを待っていたと言っ
た顔だった。

そして「いつもので良いよね」と言っ
て、紅茶の缶を取りだす。
私は狭い店内を見渡す必要も無く、彼の姿を見つけていた。

彼の方も、私が来るのを待っていてくれたのか、手を振って迎えてくれる。

そう、その後、私達は毎日の様にここに来ては一緒に演奏をしていたのである。

マスターの方もそれを迷惑と思うどころか、逆に喜んでくれて、私が用事で行かなくなったりすると心配までしてくれた。

だから私達は、時間が来るまで一緒に練習を　　いや、音楽を楽しむ事にしたのだ。

帰宅が遅くなったのを怪しんでいた家族には、先生の所で特別に見て貰っている　と、嘘まで付いていた。もつとも、コンクールが近かったので、家族の者としては先生の所で遅くまで教えてもらえるのはありがたいと思っているらしい。

それにしても……どうも一度、老先生の所へ連絡が行ったらしいが、先生は上手く誤魔化してくれた様だ。今思うと、既にあの時には先生には分かっていたと思う……老先生にはかなわない　と、思った。

それはともかく、私は彼と一緒にこの喫茶店で演奏している時間がたまらない程に楽しかった。今ならば、音楽が好きです　と、胸を張って言える。

私の中の何かが……変わっていくのが楽しみだった……

さて、今日はなんにする？　　私は彼の言葉に、曲選びの悩み……という楽しさを知った。

「瑞葉……ちょっと来てくれる」

コンテストを2日後に控えて私が夜中まで練習をしていると、母が二階にある私部屋まで来て居間に降りてくる様に言った。私がそ

んな母に続いて居間に行くと、そこには普段はあまり姿を見せない父がいた。

「お父さん珍しいのね、日本にいるなんて……」

別にこれは嫌味とかでは無い。私の父は海外への出張が多く、一年の内半分も家にはいられなかったたので、実際に父と会う事が珍しくなっていたのだ。

「うむ、最近は瑞葉も忙しい見たいだな……」

父は久しぶりにあったな　と言って、笑った。

「ところでどうしたの？二人揃って……」

私は今、コンテストの課題曲への解釈がうまく行って、少しでも練習がしたかったたので、二人の話も早く終わらせたかった。

「前々から話していた事なんだが、留学の話、少し時期が早まったんだ」

「え？」

私は突然のこの話に、一瞬何の事を言われたのか解らなかった。

「あのね瑞葉、先生に紹介して貰った留学先の方がね、思いがけず早くに受け入れの準備が整ったらしくって、直ぐにでも来て大丈夫だって言うのよ……」

母は私のヴァイオリン留学には大賛成だったから、少しでも早く向こうに行ける様に手続きを死体のだろう。

「若先生も、早いことに超したことはないって仰ってくれてるし……」

……

「で、でも、私まだ学校だつてあるし……それに」

「あら、学校は元から休学するつもりだったでしょ。それに、早くなるって言うって一ヶ月繰り上げになるだけなんだから、大丈夫だようつ？」

「でも、どうせ一ヶ月だったら、早く行く必要も無いんじゃない？」

「あら、瑞葉は反対する理由でもあるの？」

「べ、別にそんな事は無いけど……あまりにも急だったから」

「だったら早い方が良いと思うの。若先生の紹介もある事だし、向こうへ馴染むのだったら少しでも早いほうが良いでしょう？」

母は私がヴァイオリンのソリストとして活躍する為だったら、何でも強引にやってしまいう様な人だった。それに、今回は楽界でも力のある先生の紹介だったので、なんとしても断る事など考えられなかったのだろう。

話し合いというよりは、既に決まっていると言った感じだった。

でも、今はそんな事はどうでもよかった。

私の頭の中には、そんなくだらない事など頭に無く、ただただ、彼との演奏が出来なくなるのが信じられなかった。

もう少し先の事と思っていたのに、急にこんな事になるなんて私はそう思うと、急に胸の奥が締め付けられる思いにかられた。

この後、母は何かを言っていたらしいが、頭に入る訳がなかった。私は部屋に戻ると、自然……涙で視界が曇っていた

カランカラン

いつものカウベルの音が、今日に限って少しだけ重い響きに感じられるのは、やはり、留学の事が頭の中から離れなかったからかも知れない。

私はコンテストを明日に控え、彼やマスターには今日はここには来ないと言っていたのだけれども、来てしまった。

「いらつしゃい……どうしたんだい？瑞葉ちゃん。今日は来られな
いって言ってたのに……」

マスターは私の顔をみて、何かあったのかい？　と聞こうとしたが、途中で言葉を切った。

私は何も聞かないでくれるマスターがありがたかった。彼は私はテーブル席の方へと目を向けた。

そうだよね……今日は来られないって言うてあるのだし、彼がこの場所に居る訳が無いわよね　私はいつもの席に彼が居ないのを確かめた。

コンテストが終わって3日後には、私は向こうへと行かなくてはならない。

少しずつ留学の準備は進めていたものの、後一ヶ月あると思っていたので荷造りなど……やらなければならぬ事がいっぱいあって、実質、コンテストが終了したら彼に会える時間など、無いに等しかった。

私は、私はその時気が付いた　気が付いたのが遅すぎたのかも知れないけども、私は彼の事が好きだったんだ……と。

彼と一緒に紅茶を飲み、彼と一緒に演奏する事が、今の私に取ってかけがえの無いものになっている事に初めて気が付いたのだ。

失いたくない　音楽もだけれども、それ以上に彼の事を失いたくないと言う思いが、心の中を駆けめぐっていた。

彼は……私の留学を止めてくれるだろうか……

私は正直、今日ここで彼に留学を止められたら、向こうには行かないつもりだった。親がどんなに言おうとも、私が音楽を捨てなければならなくなっても、彼の為に全てをなげうつつもりでここに来た……

彼は……来てくれるだろうか　マスターが入れてくれた紅茶は、一度も口を付けられる事もなく時間と共に冷めていった。マスター

はそれを何も言わずに、クラシックのレコードをかけながらカウ
ンターの奥にある部屋へと引き上げていた。

どれ程時間が経ったのか、ふと時計の針を見つめると、私達がい
つも会う時間になりつつあった。

どうか来てください　私はそれを眺めながら、祈る様な気持ち
だった……するとその時、入り口のカウベルがいつもの様に鳴った。

カランカラン

「やあ、どうしたんだい？今日は来られないって言ってたのに」

彼は私の姿を確認すると、いつもの様な笑顔で聞いてきた。

私はそんな彼の胸に　飛び込んだ。

どうしたんだい　心配する彼の言葉はそこで止まり、変わりに
私の事を強く抱きしめてくれていた……私はそんな彼の胸の中で、
感情にまかせるままに泣きじゃくった。

小さい頃でも、親にも見せたことのない泣き顔だった。

けれども、私にはそうすることが気持ちよかった……彼の胸の中
で泣けることが、今は一番幸せだったのだ　彼の方も、私の好き
なようにさせてくれていたのが嬉しい。

私が落ち着きを取り戻したのは、それからしばらく立ってからの
事だった。

「一体、どうしたんだい？訳を話してもらえないかな……」

彼は、泣きやんだ私に自分のハンカチを差し出しながら聞いてき
た。

「私……私、コンクールが終わって直ぐ、留学しなくてはならない

の……」

私はこれまでの経緯を全て話していた。そして

「私、どうして良いか分からなくて……私は失いたくない。私、あなたと一緒に演奏することが大好きなの……私、あなたの事を……愛してます。あなたを失ってしまうのなら、コンクールにも出ないし留学もしたくない」

私は自分の気持ちの全てを、彼に打ち明けた。

自分でもどうしてこんなに切ない気持ちになるのか分からない。つい一週間前に知り合ったばかりなのに、話だってそれ程多くはしていないのに、それでいてお互いの事をこれほど良く知り合えるなんて

私は彼の事を、本気で愛してしまったのだと再確認した。

だからそれを失う事なんて、考えられなかった。

彼に止めて欲しかった。彼が止めてくれるなら……私は自分で卑怯だとは思ったけども、彼に私の行く先を決めて欲しかった。

だから、私は彼の言葉を期待する反面、怖くもさえあった

「瑞葉……」

彼は真っ直ぐにこちらを向いて話してくれた。

「君は、コンテストにも出るべきだし、留学も……するべきだと思う」

それは 私にとって哀しい言葉だった。

「そう……ですよ。一週間前に知り合ったばかりなのに、愛してるなんて……迷惑ですよ……」

「違う！ー違うんだ……俺だって、君がいなくなってしまうのは辛いんだ！」

え？

彼は本当に苦しそうな顔で叫ぶように言った。

「でも、それ以上に、君にはヴァイオリンの世界で生きて欲しいんだ……俺はね、音楽って言うのは言葉や文化を越えて、世界共通の言葉になれると思っていいんだ。自分の気持ちも、曲に隠された思い、楽しみも、悲しみも、愛おしさも、憎しみも……そしてそれを伝えられるのは、音楽家に与えられた特権とも言うべきものだと思うてる。俺は瑞葉に、それを伝えられる様な音楽家になって欲しいんだ」
「でも……留学したら二年もあなたに会えない」

私の言葉は、彼の口づけによって遮られた。

長い、長い口づけだった……お互いが、お互いのことを知り合える一つの形。

「瑞葉……君はコンクールにでるんだ。留学だって、しなければ絶対に後悔する。俺は二年くらい待ってる。だから、俺の為に音楽を捨てるなんて言わないでくれ。音楽の楽しみを捨てるなんて言わないでくれ……俺たちが感じた音楽の楽しみを、多くの人に伝えて欲しい」

彼はそう言って、きつく抱きしめてくれた。

「明日のコンクールにはボクも行くよ　観客として、聞かせて貰うから」

私は

コンクール会場では、まるで息さえも止めているかのような沈黙が訪れていた。

その中で、彼女は最後の音を出し終わっても、その余韻を全身で確かめるように瞳を閉じて動かなかった……

会場にいた人々は、そんな彼女を凝視しながら緊張が一気に高まった。

はあ　彼女はしばらくして、全身の力を抜くように大きく息を吐き出した……すると、それを待っていたかのように、会場が拍手の渦に巻き込まれた。

その日、一番盛大で、惜しめない拍手が贈られたのは彼女だった。単なるコンクールでこれほどの盛大な拍手が贈られるのは珍しい。それ程大きな拍手の渦。

きつと、会場にいた全ての人たちが感じただろう。

彼女のヴァイオリンがすすり泣き、そして歌った事を。

そして、それを見ていた彼女の師は、一人、つぶやいた。

彼女は本当の恋をしている　と。

シーン016：春の人

その昔、欲しくてやまない物があつた。

少し手を伸ばせば触れられたかも知れないのに、でも結局出来なくて……情熱は、いつしか時の長さと共に失われてゆく。

ところが最近、ふとしたきっかけでそれに触れられる事が出来た。

欲しくて欲しくてどうしても手に入れたいと願った時には叶わなかったのに、まさかこれ程の時を経て触れるとはついぞ思わなかった。

古ぼけた一葉の写真。

俺が欲しかったのは、そこに写る貴女の 笑顔。

ONE SCENE STORY 四季シリーズ第一弾『春の人』

彼女を一言で表すならば、そう「春」と言う言葉が当てはまる。

彼女の周りには、常に優しい空気が流れていた。厳しい寒さに身を縮めていた木々も、芽吹き始める春の空気。

俺の初恋は、そんな春を身に纏う人だった。

しかし俺は、そんな彼女に何も行動を起こさなかった。いや、起こせなかった情けない男と言った方が良いかも知れない。
それでも何故だか、心の中は静かだった。

眺めるだけでも良い　心の底から愛した人であるにもかかわらず、俺は本当にそんな風に考えていたのだ。

彼女に触れてみたい　そう思う気持ちとは矛盾した気持ち。けれども、それ以上に触れる事が怖かった。自分のような者が触れてしまったら、彼女の持つ春の空気が乱れてしまうのでは　と、本気で思っただのだ。

これはどう言った感情だったのか。芸術品を愛でる気持ちなのか、ただ単に自分に勇気が無かったただけなのか……今でも分からない。ただ、一つだけ言えるのは、彼女は何処までも、そしていつまでも変わらぬまま進み続けるのだろう　と言う、漠然とした思い。

それは願望に近いモノかもしれないが、俺には確信に近いモノがあった。

彼女は惑わない

きつと彼女は、自分の決めた道を進み続けるのだと思えた。
だからこそ、俺は彼女に触れられなかったのかも知れない。

冬の寒さに凍えているだけの俺には、彼女に触れる資格など、何処を探しても見つかるわけは無かったのだから。

俺はその時、何の気も無しに街の中を歩いていた。

休日、誰に誘われる事も無かった日、目的もなく街の中を歩く
ただただ街の中で、流れゆく人々の姿を追う一日。きっとその流
れに乗っていれば自分も街の一部として溶け込める そんな思い
で街の中を歩く一日。

そんな時、ふと 俺の足が止まった。

懐かしい名前を目にした気がする。

そこはギャラリーと呼ばれる場所だった。店内を見渡せる様に大
きく取られたガラス張りの窓の中、彼女の名前がそこに あった。

高科瑞葉個人展 そこに彼女の名前があつたのだ。

何時間立ちつくしたのだろうか 俺は一体何時間そのギャラリー
の前で立ちつくしていたのだろうか。周りの人間が不思議顔で俺
の事を見ているのも知らない。そんなモノ、俺は何も感じない。そ
んな事、俺は知らなくていい。そんな些細な事、今の俺には関係な
い。

俺の足がギャラリーの入り口に向かう 無意識に。

この先に、俺が長年求めた答えがある ドアに掛けた手が止ま
る。

彼女の作品を手取る事が出来るのだろうか ためらい。

今の自分が、彼女の作品を手にする資格があるのだろうか 小
さな恐怖。

それでも俺は 彼女の作品に触れなければならない。

止まっていた時間を取り戻すかのように、その手に力を込める。

彼女を一言で表すならば、春　　うらかな陽気に誘われて、寒さという殻を割り、木々に新芽の芽吹きを与える。

それが彼女

手にとって見る事も出来ますよ、販売もしています　店員の言葉が頭の中にこだまする。

彼女に触れる事が出来る　　やっと、この手にする事が出来る。そんな思いに手が震える……

そつと、そつと両方の手で包み込むように一つの絵皿を取る
白い陶磁器の皿。

中央に桜の花びらを模した小さな小さな絵皿を、俺はまるで宝石でも扱う様に、両の手で包み込む。

自分でも分からなかった　止める事など出来なかった。止める事なんて、思いもしなかった……今ここに、俺の両手の中に、優しい春の暖かみがある。

感情なんて全然コントロール出来なかった。する必要も無かった……俺は今、自分にも、まだ流せる涙が残っている事が嬉しかった。

彼女は真っ直ぐに、惑うことなく、その身に春を纏いながら進んだのだ　それを知って、どうして涙をぬぐうなど必要か。

俺は彼女の作品に、そんな春の芽吹きを感じたのだ

これで俺も

前に進める

シーン017：夏娘

向日葵は何故、太陽に向かって咲き続けるのか。

向日葵は何故、突き抜けるように背を伸ばすのか。

彼女は どうして、向日葵のような笑顔を絶やさないのか。

彼女の笑顔は向日葵の花

ONE SCENE STORY

四季シリーズ第二弾『夏娘』

「僕が考察するに、彼女は何も考えてない」

彼女の名前は北崎凜。

自分のことを「ボク」と呼び、人のことを「キミ」と呼ぶ彼女は、色素の薄いショートヘアがよく似合う。笑うと八重歯がによつきりと、少し魅力的。屈託のない性格で大人気の彼女は、クラスの誰からもすかれてる。

そんな彼女は、常に笑っていた。

僕が彼女の悲しそうな表情を見たのは、給食の量が少ないという、何とも色気の無い話だけ。と

悲しいとは違うが、身体測定の前日に、自分の胸をもみながら困った顔をしているところを見た事もあるけれど、直ぐに笑顔で「ま、いっか」と言っていたのを思い出す。

どうやら彼女にも人並みの悩みを持つ事があるらしい。それが瞬きの間だったとしても新鮮だった。

「ボクがどうしたの？」

彼女は誰とでも親しく接する　それも、特上の笑顔で。観察している僕の視線を感じたのか、彼女がいつもの笑顔で話しかけてきた。

「え、あ、いや」

まさか気が付くとは思わなかった僕は、その時、なんと言って良いのか分からないまま、彼女の顔を正面から見ると事も出来ずにうつむいてしまう。

「キミは……ボクのこと、嫌い？」

そんな訳ない、そんな訳がない。なぜなら僕は　彼女のことを大好きなのだから。

でも僕は、いつも向日葵のような笑顔のキミに、恥ずかしくて話しかけられないんだ。

「ボク、いつもキミに話しかけても話してもらえないから……ボクのこと、嫌いなのかな……」

え？

僕が彼女の顔に悲しみの表情を見つけたのは、これが初めてだった。給食の量が少ない　と、嘆いて見せた表情とは違う。いつも彼女を見ていた僕だからこそ分かる。

彼女は今、本当に悲しんでいる

いつでもどこでも明るい彼女。

クラスでも人気があって、彼女のことを好きな奴なんていっぱいいて。

彼女の笑顔は向日葵のよう　そんな彼女が今、本当に悲しそうにしている……

「ボクね、キミのこと好き」

ええ？

「な、なんで？」

「んゝわかんないや。でもボクね……キミのこと、大好きだから」

やっぱり彼女は、何も考えていないかも知れない。

一瞬だけ見せた悲しみの表情が、今はほら、まるで向日葵の様な顔してる。

向日葵がどうして太陽に向かって伸びるのか　それは太陽の光を求めているからなんて理由は知っている……けれど、理由なんて知らないのかも知れない。

彼女が笑う　僕にはそれだけで充分なのだから。

「ぼ、僕も……君のことが大好き……です」

「ほ、ほんとう？」

「うん……僕、ずっと君のことが好きで、でも恥ずかしかったから、あまり話しかけられなかったんだ」

僕の正直な気持ち。それを、恥ずかしくても彼女の顔を正面にして告白する。

「嬉しい」

その時の彼女の笑顔は、まるで太陽の輝きだった。

そうか　そうだったんだ。

僕はこの時気が付いた。

彼女の笑顔は向日葵なんかじゃない。向日葵の様な笑顔を引きつける、夏の太陽なんだって。

だって僕の顔も、彼女に引き付けられるように
から。 笑ってるんだ

シーン018：秋風

春の風と比べると肌寒い
夏の風に比べると爽やかで
冬の風に比べると少し優しい

秋風は

暮れゆく空に問ふ、誰そ彼

ONE SCENE STORY 四季シリーズ第三弾『秋風』

「体に障る」

きつと彼は、私が聞き入れないと知りつつも言わずにおれないの
だろう。

「もう少しだけ」

その言葉に彼は、肩口のショールを掛け直してくれるだけで応え
てくれた。

秋の夕暮れは刹那の輝き。世界がオレンジ色に染まる中、病院の
屋上も例外なく色彩を失ってゆく。

それは急速に私の身にも降りかかる。

一体私には、どれだけの時間が残されているのだろう……この薄
れゆく世界のように、確実に削り取られてゆく。

それでも私は、この屋上で夕陽が沈みきるのを見続けていたかっ
た。

陽が傾き出す頃から、それこそ完全に沈み込むまでの短い時間。私はこの時間が好きだった。

例えばそれが、私に残された時間を容赦なく削り取る、涼やかな秋風に晒されようと、やめる訳にはいかない。

私が私で居続ける為にも、この時間は大切なものだから。

秋風が、髪の毛を乱して頬に触れる

「ごめんなさい、つき合わせてしまつて。戻りましょう」

今日も一日が終わる。

「ねえ涼君……もう、病室には来ないで」

「瑞葉」

私がこの言葉を言うと、彼は本当に悲しそうな表情をする。必死に隠そうとするのだが、私にはそれがよく解る。

きつと唇を奪つてでも、私の言葉を封じたかっただと思う。

それが叶わぬと知つてなお、彼が病室に来てくれるのは 正直辛い。私が選択した事とは言え、私たちは、私と涼は、つい二ヶ月前までつき合っていたのだから。

その関係を一方的に断ち切つたのも私だった。

「涼、別れましょう」

私はこの言葉を言う前に、ある一つの決心をしていた。きつと決心しなければ、私は彼の前で、無様な泣き顔を晒していたと思う。

それでも

それでも私はその決心に逆らつてまで、彼を引き留める事はしなくなかった。きつと、最後に、別れの言葉を言えなくなる……その為だけに、私はある一つの決意を形にしたのだ。

「ふざけてるのか？」

「私は本気よ」

あの頃の私は、まだそれ程衰弱していなかった。私を見つめ返す彼の瞳にも、見つめ返すだけの力が残っていたはずである。例えば余命三ヶ月を宣告されていたとしても、あの時ばかりは逃げる訳にい

かなかった。

「理由は、教えてくれないのか」

「ごめんなさい」

「どうして理由も言えない」

「ごめんなさい」

問いかけの全てに「ごめんなさい」とだけ答え、私は彼の元を去った。

それが私に残された唯一の選択と、それが一番正しい選択だと思っただから

私が最後の刻を迎える時、きっと彼は、私の側にいてくれる。それは分かり切っていた。だから　だから私は、一方的な別れの言葉を口にした。

きっと私は、私の最後の刻に、口にはならない言葉を言ってしまう。

愛してる。

彼を縛り付けてしまう、私のわがまま。

私は秋風にならなければならぬのだ。

春の風と比べると肌寒い

夏の風に比べると爽やかで

冬の風に比べると少し優しい

秋風は　ただの想い出。

秋風のように、彼の中ではただの想い出にならなければならない。この先彼に訪れる、春風の前の、ただの想い出に。

ああ、でも、彼からは、一度も別れの言葉、聞いて、ない

シーン019：冬の華

俺は彼女の手紙を手にしたまま、全ての感情が消えて無くなってしまったかのような無の時を迎え、そして、自嘲気味に笑った。

決して自分が悪い訳では無かったが、それでも俺は、笑うことでは今の自分を支えられないと……思った。

ONE SCENE STORY 四季シリーズ第四弾『冬の華』

きっかけは、いつも配達をしているお客さんからの一言だった。

「朝倉君って、彼女とかいるの？」

通常ならば荷物は玄関先までで良かったのだが、女性の多い職場ではそれも大変だろうと倉庫まで運んであげる事がある。その質問は、いつものように倉庫まで荷物を運んであげている時だった。

「いや、それがいないんですよ……」

そんな俺は、当たり障りのない返事をするにしていた。

「あら、朝倉君って感じが良いから、彼女とかいそうなのにな……」

名前も知らない30代前半の女性に続き、少し年輩のおばさんが続く。

「本当にいないの？全然そんな風に見えないけど」

「でも、本当にいないんなら、ねえ、あの娘なんか良いんじゃない

？」

あらかじめ二人の中で話がまとまっていたのだろう、何度か本当に彼女がいなかったのかと聞かれた後、俺に一人の女性を紹介したいと話してきた。

「ほら、私たちの職場って女性が多くて横のつながりはあるけど、どうしても男の人と接するチャンスが少ないじゃない、それでね、朝倉君より少し年上なんだけど、第二保育園にいるあの娘、知ってるでしょ？」

そりゃ知らない訳がない。俺はこの地域の小中学校と共に、保育園関係の殆どに配達を、それどころか営業として出入りしているのだから。

「あの娘ってスッゴイ奥手だから、彼氏とかいないらしいのよ……朝倉君どう？ ああいう娘ってタイプ」

俺は第二保育園にいる「あの娘」を思い浮かべる

第二保育園には年上の女性は二人いるのだが、どう考えても、50代の女性でないことは確かだ……という訳で、ある一人の女性が頭の中に浮かぶ。

女性の年齢を詮索するのは失礼と言うものだが、その女性は俺よりも5才くらいは上だと思われた。つまりは30は越えていると思われるのだが、結構な美人　　と言うイメージがあつて、独身と言うのが疑わしく思えるのだが、どうやら未だ独り身であるらしい。彼女は特別印象に残る様なタイプではかったが、どこか寂しげな雰囲気纏う、儚げなイメージのつきまとう女性だった。

「ね、彼女の方には私たちから話しておくから、ちょっと話だけでもどう？」

どうして女性はこういった話しが好きなのだろう……これが噂に

聞「お見合いおばさん」と言うやつか。とは言え今の俺には彼女と言った存在も無く、営業なんてやっているくらいなので人との出会いは歓迎する様にしている。

俺は最初、本当にそんな些細な理由で断らなかった。

「紹介してくれるならお願いします」

実に珍しい 自分でも珍しいと思う。お客さんと言うことで、いつもならばこの手の話は曖昧にはぐらかすのが常の俺は、この時何故か、誘いを断らなかった。

いや、断れなかったのかもしれない。触れれば手折れる様な印象を持つ彼女に、何かしらの興味があつたのかも知れない。

それは保護欲と言ったもののか だとすれば、俺は自分自身に嫌悪しなければならぬが、どうにもそれとは少し違う。俺は彼女に惹かれるモノを感じ取っていた…… そう思いたかった。

そして俺は、その理由を知りたかったのだ。

彼女が持つ何か。

俺は後に、これ以上ない程の自嘲を味わう事になるなど知るよしもなく、誘いを断らなかった事を後悔する。

「それじゃ連絡先…… 名刺に載っている携帯の番号で良いのかしら。彼女に連絡するように言っておくから」

荷物を降ろし終わると、二人の女性は意味ありげな笑顔で名刺を取り出した。俺がこのエリアの担当になるときに渡した名刺だった。俺は紹介してくれるなら と、新しい名刺を彼女達に渡し、この場を後にした。

期待していなかった と言えば嘘になる。

現在彼女と呼ばれる存在もいなかったし、僅かばかりでも気にな

る女性から連絡を待つと言うのは、珈琲にミルクを入れたときのよ
うな曖昧な感情になる。期待も不安も入り交じる　そんな感情だ。
しかも、いつまで待っても連絡が来ない。

いくらこのエリアの営業担当で配達もあるとは言え、保育園に関
しては毎日の様に連絡を取る事もなかったし、配達にしても一週間
に一度程度の頻度なので直接顔を合わせる事も少ない。

しかも、その保育園に配達があったとしても、彼女は希に休んで
いるらしくてすれ違いが続いた。この時ばかりは恨めしく思ったが、
それ以外の仕事も多くて気にしてばかりもいられない。

俺が「振られたかな……」と思い始めた頃、彼女のいる保育園へ
配達する事になった。

「いつもご苦労さまです」

俺が、僅かばかりの気まずさと共に扉を開けると、そこに、彼女
の姿があった。

「朝倉さん……朝倉さんは富士見保育園の調理場の方はご存じで
すか？」

彼女の瞳に、どのような感情が込められているのかは分からない。
けれども、何かしらの決意の様なものはあったと思う。彼女は確認
するような口調で話しかけてきた。

「あ、はい、もちろん知ってますけど……」

「お二方からあなたの名刺を頂きました。どのような経緯であなたが
名刺をお預けになったのかは分かりません……ですが、お二方の話
を聞き、私なりにお返事を認めさせて頂きました。どうか、受け取
ってください」

そう言う彼女は、若い女性が使うには落ち着きと気品のある一
封の封書を手渡してきた。

あの　俺が何か聞こうとしたのを「私の、現状を認めさせて頂
きました」と、彼女が止める。

「富士見保育園のお二方には、私の方からはお返事をしなかった

と、伝えておきます。それから、手紙の内容は、出来れば口外しないで頂きたいのですが」

俺は彼女の真剣な眼差しに、これ以上、言葉を挟む事が出来なかった……

俺は仕事が終わると、その手紙を大切に家に持ち帰った。

封書の表には、彼女の名前のみが書かれていたが、それだけで達筆である事が分かる。

どうやっても俺には、これ程整った字を書く事が出来ない。そう思うと共に、彼女の性格が、この文字だけでも伝わってくるほど、彼女の文字は美しかった。

俺が丁寧に封を切ると、表書きに記された様な、真っ直ぐな文字が連ねられていた。

前略

富士見保育園の方から貴方様のご名刺を頂き、私へのご紹介と言う話を聞きました。

ですが、貴方様の様な素敵な殿方に、私は年を取りすぎておりません。

少々私事を書かせて頂きます。

私は幼少の頃より体が弱く、両親の庇護の元でしか生活の出来ない暮らしをしております。今も体調が安定せず、休み休み保育園で働かせて頂いています。

私は当年、35才と言う年を重ねておりますが、一度も男性とお付き合いした事ありませんし、お付き合いしたいとも思いません。

貴方様より名刺を頂きましたこと　大変ありがたく存じますが、貴方様のような素敵な方には、きつと、他に素敵な方が現れると信じております。

勝手ではありますが、今後とも、より良き仕事上のお付き合いを、お願い申し上げます。

草々

ははは

俺は何故だか……笑った。笑うしかなかった。

彼女のなんたるかも知らず、赤子の様な好奇心で触れてしまったのだ。罪の意識もない赤子ならば良かった……俺は彼女に対して、なんとすれば良いのか。

俺は自らに侮蔑の意味を込めて　笑った。

「冬を選んで咲く華もある」

ふと、そんな言葉が浮かんだ。

厳しさを選び、それでも手折れる事のない華なのだ。

彼女は冬の寒さに、その身を折れることなく咲き続ける　冬の華

- - -
- - -
- 後書き -

冬を選んで咲く花もある　　というのは、ネット小説で知り合った方が書かれた文章なのですが、私はこの言葉が一等お気に入りだったりする。

種々様々な花の中で、わざわざ冬を選んで咲く花がある　　単に事実をなぞっただけの言葉だけれども、この言葉に感じるものは、それこそ雑多に、そして多様な感情がある。

わざわざ厳しい冬に咲く花。

その花は、何を思っただけの冬を選んでつばみを開花させるのか……人間に例えるならば、どうして自ら厳しい選択をするのかそれはその人にしか知り得ない経験則によるものだと思われるのだが、それを知り得ない他人に取って、理解の範疇を越えて有り続ける孤高の存在に他ならない。

今回のワンシーンに登場する方は、正に冬を選んで咲く花そのものの。

覚悟の違い、自ら歩んできた道程……そこにあるのは諦めの感情なのか、それとも悟りの境地なのか。

私は今でも思う。この時自分はどうすれば良かったのか　と。

シーン020：ラストシーン（前書き）

この作品は、ワンシーンシリーズを通して読んでくれた方を対象としております。単体では意味がわからないと思いますので、よろしければ、全ての作品をお読みいただければと思います。

シーン020：ラストシーン

1 色

「お父さん、お母さん、今まで私を育ててくれてありがとう。私、きっと幸せになるから心配しないでね」

「ええ、心配なんかしないわよ、涼君と一緒になら。それにあなたは私の娘なのよ」

「うん……」

「ほら、あなたも何か言わなくちゃ」

「……」

「全くダメね、こういう時の男の人って。ほら、あんたも化粧が崩れちゃうから、泣くのは後にしなさい」

「はい」

「いい？ 背筋を伸ばして行くのよ。これからも」

コンコン

「もうすぐ式が始まりますが準備の方はよろしいですか？」

純白の、雪の白さを思わす純白のドレスを身にまとい、瑞葉は少し、背筋をのばした。

「幸せに……なります」

3 距離

「見てあなた」
「お、どれどれ？」
「ね、私の思ったとおりでしょ」
「こいつは将来が楽しみだ」
「当然よね、なにせ私達二人が生み出した、最高傑作なんだから」
「おいおい、そこまでいうか？」
「フフフッ」

その小さな手の持ち主は、まだ理解出来ないだろう。あの時の青の事。
だけど、いつかはきっと、必ずあの青を見つける時が来る。
私たちの様に

「良い色使いだ」
「そうね、あの時の……あの青を思い出すわ」

4 ワルツ

「ね、ね、お母さん。この間の曲ってなんて言う曲なの？」
「この間って？」
「ほら、父さんが聞かせてくれたじゃない」
「ああ、あれね……でも、どうして？」
「え、うん、その、友達の前で歌ったら良い曲だって言われたから」
「友達……ね。ふふ」
「そ、そうよ、友達。それよりも曲」
「はいはい。あの曲はね、ちょうどあなたと同じくらいに、母さん

が作詞したものなのよ」

「え？お母さんが？」

「そう、今のあなたと同じ瞳をしていた時に
ね」

6 瞳

「わあ、雪が降ってきた」

「本当だ、どうりで寒さが違うと思ったよ」

「でも私、雪って好きだなあ」

「雪の降る日に
」

「え？」

「いや……」

「な、なに？気になるなあ」

「笑わないでくれよ」

「多分、ね」

「俺さ昔、雪の降る日に天使を見たんだ」

「天使……って、羽の生えてるあの天使？」

「そ、今も見えるんだぜ」

「ど、どこに」

「それは」

「それは？」

半信半疑でのぞき込む瞳は、あの時と同じ。

「俺の目の前に……さ」

7 遠い海

「この時期になるとね、思い出すの」

「ん、何を？」

「私の恋の原点」

「なに？それ」

「私の失恋物語」

「ふうん、そこ……で、その事はもう吹っ切れたの？」

「そうね、もう何年も昔の事だもの」

「吹っ切れて無い訳ね」

「うん……でもね、その事がいつまでも心の中に残っているのは、初恋の人を忘れられないのと一緒に」

海との距離はあんなに近かったのに、結局、彼との距離は縮める事は出来なかった。

「でも私、あの恋をした事で、少しだけ大人になれた気がするわ」

8 風詠う

「朝倉先生、先生はこれから風景を専門にしていくんですか？」

「おいおい、先生は止めてくれよ」

「あ、スイマセンつい。でも珍しいですよ、先生って呼ばれるのが嫌いなんて」

「嫌いと言っか、柄じゃないだけさ……そうそう、風景を専門にし

ていくつて質問だけど」

「はい。先生は　じゃなかった朝倉さんは風景専門ですけど、その昔はスタジオでジャケとか撮ってたって話を聞いて」

「ああ、アレは師匠のお手伝い。でも、今でも人物は撮ってるんだよ」

「へえー一度見てみたいなあ朝倉さんの人物。そう言えば、モデルさんはどうしてるんです？」

「モデルは君も会ってるさ」

「え？」

「ほら、ちょうど……」

「あら、あなた。これからこの仔の散歩に行こうと思ってたのよ」

9 乙女

「おつす！」

「智子、早いじゃない」

「ま、一応あんたの一番の親友を自認しているからね。こんな時くらいは早く来るわよ」

「ありがとう」

「しっかし納得いかないわ。あんたみたいに夢見る乙女の方が先に結婚なんて」

「ふふ」

「あゝあ、あんたがどたキャンした合コンにいい男は来ないし、あんたはあんたで、家に帰る途中でいい男を見つけたって言うし。ツイてない」

「智子も腕まくりしなくちゃ」

「え？何それ」
「恋せよ乙女……力こぶってね」

1 1 特別

「あゝあ、どうやったら父さんや母さん見たいに、特別の出会いを見つけれられるのかしら？」
「あら簡単よ」
「それは簡単だ」
「な、何よ二人して」
「だって、特別は日常の中にあるのよ」
「そりゃ、特別は非日常の中にあるのさ」
「もう……結局どっちなの？」

1 2 視線

「で、先生、その後どうなったんすか？」
「それは聞くなって。お前もいい男になりたかったらな、余計な事は聞くなよ」
「へえへえ」
「それより、昨日の課題は出来たのか？」

あの時の彼女の言葉

「ありがとう」

その一言が、彼女の最後の講義だった。

13 子猫

「おい、凜。ちょっとちょっと」

「どうしたの？そんな小さな声で」

「俺たちのお姫様がさ、小さな従者と一緒にお昼寝中さ」

昔は飼うことが出来なかった子猫たち それが今、小さなお姫様と一つの布団で丸くなっている。

「まるで昔の凜を見てるようだ」

「もう……」

14 歩幅

今一度、私は彼からの贈り物を受け取ったのだ。

ゆっくりと、ゆっくりと……

相手に会わせて進む道 ヴァージンロードに、歩幅が揃う。

15 刻む心

カランカラン

まだこのカウベルを使っているんだ　はやる気持ちを落ち着かせるベルは、同時に、自分が本当に帰ってきた事を教えてくれる。

「み、瑞葉ちゃん……」

「久しぶりですマスター。いつもの、お願い出来ますか？」

「もちろん。レコードの方も、変えてくるよ」

そう言って取り出したレコードは、モーツアルトのクラリネット五重奏曲。

「覚えてくれたんですね」

「忘れる訳がないでしょ……って、今、コンクールで忙しいんじゃないの、瑞葉ちゃん？」

「忙しいなんて言ってられませんよ。だって」

カランカラン

「私の、大切な人との待ち合わせですから」

16 春

「最近頑張ってるな」

そんな声が、いつの間にか当たり前になってきた。

「何か思うところでもあったの？」

俺に生きる目標が出来てから、周囲の目も変わった。

「春って」

「ん？」

「春ってワクワクするだろ」

「まあ、暖かくなって、外に出るのが楽しくなるわね……って、恋人でも出来たの？」

「残念ながら、でも」

俺は春の暖かさを、手に入れたのさ

17 夏

「海いこうよ、海。ボク、海って大好きなんだ」

凜と同じ大学に通う事になった俺。あの頃から俺は、彼女の輝きにあてられっぱなしだった。

「ねえ直哉、海嫌い？ ボクは好きなんだ。なんだかき、ボクの全てを全力で受け止めてくれそうじゃない」

「俺じゃ凜のこと、受け止められない？」

「あはは、直哉、海に焼いてる？」

お互いの呼び方がかわり、身長もあの頃よりだいぶ俺の方が高くなったとしても、彼女の笑顔は翳らない。凜の笑顔は太陽の輝き。

俺はこれから、向日葵の笑顔でいられる。

18 秋

秋風を身に受けると郷愁に似た感情を思い出す。

異常に軽くなった彼女の重みと 唇の感触。

忘れ無くたって良いだろ……瑞葉

19 冬

「ねえあなた、今度シモバシラの花でも植えようと思っただけど」
「シモバシラの花？」

「ええ、白い小さな花が、8月の下旬から10月の下旬まで見られるんだけど、冬になるとね、もう一つの花が咲くのよ」

「もう一つの花？」

「そう、厳しい冬の寒さの中、茎が地中の水分を運んでね、枯れたはずの花びらが凍って霜柱の花を咲かせるの。朝の寒い時間にしか花は咲かないんだけど、冬を選んで咲く華ってところかしら」

冬を選んで咲く華

「どうしたの？」

「いや、どうして冬に咲く華つて言うのは、そんな厳しい季節を選ぶんだろうと思ってね。もっと暖かい季節もあるのに、どうしてわざわざそんな季節を選ぶんだ？」

「うーん、詳しいことはよく解らないけれど、元々そう言う環境で育ってきた花だったら、逆に暖かさが辛いんじゃないかしら」

「辛い か」

「もっとも、その花が選んだことなんだから、それをどうこうするよりは、あるがままにした方が良いとは思っけど」

「そう……かもな……」

俺はまだ、あの時の答えが見つからない。

けれど 冬の華に触れることは出来なかった。
それだけのこと。

20 ONE SCENE

夏の乱反射に目を奪われて

徐々に色あせてゆく風に寂しくて

舞い散る純白の花びらに凍えても

季節は巡る

木々が芽吹き、季節を迎えるように

二人の季節は 今、始まる

シーン020：ラストシーン（後書き）

これは、人によってはあんまり読みたくないものかもしれません。と言つのも、今までのワンシーンのその後と言つ題材だからです。

何故私がこの様な断りを入れるのかと言つと、このONE SCENE STORYでは、完結を曖昧な形で終わらせる事が多く、その後と言つのを読者の方の想像に任せる様にしているので、この様に後から物語りを完結させると言つのは、一種の裏切りの様な形になるからです。

読者の方が想像した瑞葉と涼のその後と、私が書いたその後が違った話になってしまった場合、感情的に良いものではないでしょう。しかし、何故あえて今回この様な形にしたのかと言つと、作者のエゴと言つしかありません。先程も書いた通り、ONEは曖昧な形（結末は書いてあるが自由度が強い）で終わっていますが、その先の事も書いておきたいと言つ、エゴ以外のなものでも無いからです。

特に、今まで読んでくれていた方の中には、違和感を感じたり裏切られたと感じたりする事もあるかも知れません。

ですから、一番最後で何ですが、あんまりお勧めはいたしません。それから、途中抜けている物語に関しては、それ以上書く必要が無いと判断したものです。その後を書かなくても良いと言つ作品です。

さて、今回のこの様な形のONE SCENEはどうだったでしょうか？

恋愛のワンシーンを切り抜いた物語を、短い文章量で表現すると言つ形で始まったONEですが、私自身、ここまで書くとは思っておりませんでした。

当初、文章を書く　なんて殆どやった事が無かった私が、HPの更新頻度を上げるために短めな作品を書くのはどうだろう……と、

少々俗な思考の元に始めた作品だったのですが、読み返してみると、その時の自分自身がどう言った環境に置かれていたのかを思い出せたりと、良い意味で都合の良い作品になりました。

初期の頃、推敲もしてない原文を読み返してみると、素人さんも裸足で逃げ出すほどの稚拙な文章に、私自身が逃げ出したいと頭を抱えるモノも多く、歴史を感じさせてくれたりもします。

それとは別に、本当に書きたいモノを、本当に自由に書いていたんだなーと、あの頃の自分を羨ましく思ったり、ねたましく思ったり……少々複雑な感情も。

さて、ここまで続けてきたONE SCENE STORYですが、一応の区切りがついたこの作品で終わりにさせて頂きます。

これは、自分のやりたい事の為に時間を使う と言う意味合いが強いです。

ONEがやりたい事じゃ無かった とは言いません。私自身、昔の作品を読んでいて、素直に良いな……と、思えたりするので、これ以上も続けたいとも思いますが、それ以上に、やらなければならぬ事が出来た。そう言うことなのです。

涼と瑞葉の関係。

凜と直哉の関係。

それ以外の登場人物達も、私は大好きで、ほんと、私の作品に出演してくれた事に感謝します。

きつとこれからも、私が書かなくとも彼らは彼らが信じた道を歩むだろう と、物語の登場人物ではありますが、本当に思えます。

そして最後に、この作品を読んで頂いた方に、素敵な出会い、素敵な時間、素敵な想い出が訪れますよう、感謝と共にお祈り申し上げます。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4733d/>

One scene story

2010年10月8日12時57分発行